女[illegible]

明[illegible]月五日發行

第六十二號

東[illegible]之社

女鑑第六十二號目次

おいま長兵衛



女鑑 第六十二號

女鑑

春を惜しむ心情

盛なるものは、必、時ありて衰へ、來るものは、又、時ありて去るは、世の習なれども、暮れ行く春の別を惜しむは、亦、一般の人情なりけり。咲き滿つる枝頭の花は、いつしか落ち散り、九十の光陰は、水の如く流れ去りて、青葉茂り合ふ夏の首となり、昨日まで聞きし鶯の聲は、今日は、杜鵑の初音となり、黃金なす山吹の籬は、消え殘れる雪と見まがふ卯花の盛となりて、天地の間、あらゆる物、皆、一として、變化せざるはなし。此の變化の無窮なることは、人、皆、これを知ると雖、時の、俄に移り行くに逢へば、亦、坐に、哀を感ずるものなり。

この感情は、即、人事萬般に對する情と同一のものなり。花を憐む心は、則、人を憐む心、春を惜しむ情は、則、別を惜しむ情ならぬはなし。されば、此の變化ある天地の間にありては、人事も、すべて、之に伴ひて、變化あらざるはなし。古人の句に、人生髣髴花開落などいへることあり。死生も、榮枯も、互に往來するもの、古今の別なきのみ。かゝる際は、多くは、人の心を迷はし、慮を勞さしむる所にして、なべての人の憂喜は、相半するものなり。こゝに於いて、或は、佛家の無常の說も出で來て、人をして、轉、世を厭ひ、死を希はしむるなり。世の定めなきを感じては、遂に、淫佚の心、遊惰の念を起こして、大に、其の身を傷ひ、困厄に陷るあり、人の天性を喪ひ、人道の當然を盡くさゞるものあるに至る。古今の人、此の弊に陷るもの、其の幾千萬人なることを知らざるなり。殊

に、婦人に於いて、其の多きを見るが如し。これ、其の物の哀を感じ易き特性に由れるものなるべし。吾人は、常に、深く、之を悲しむものなり。されば、聊、こゝに、其の惑を解かんとす。花の開落は自然なり。物の變化は、亦、自然なり。この自然なる天地の間に生ける人間なれば、亦、自然の變化に伴はざるべからざるは、固よりのことなるべし。さるを、自然の循環なるをも顧みず、榮ゆれば喜び、衰ふれば哀しみ、其の定まりなきを憂ひては、妄に、此の世を厭ひ、世を棄て、人事を避けんとし、或は、天堂地獄などの妄説を信じて、早く死にて、其の苦惱を脫せんとするものあり。人の、此の生を享けし所以の本分をも盡くさず、徒に、此の生を亡さんとせば、初より生ぜざるには如かず。實に、惑の甚しきものなり。

凡て、人の、道を修め、身を全うするは、其の本分を盡くさんが爲なり。世の無常を悲しみ、死生の定めなきを歎き、或は、傲奢を極めて、其の身を亡ひ、其の私情を恣よし、或は、其の天性に悖り、父母妻子の愛を棄て、其の身を殺し、其の行を傷ふも、忠孝節義の爲に、貞烈の操を立つるにはあらで、世を果さんこと、誠に、徒なることの極とぞいふべかめる。かの、人命如朝露などいふが如きは、吾人の言ふを好まぬところなり。唯、人は、自然の變化に逆はずして、已の務むべき道を行ひ、早く、全き人間の本分を盡くしてこそ、誠の人間とはいふべけれ。空しく、春をのみ惜しみ、老をのみ嘆くべきことかは。

論説

女子教育と婦德との關係（四）

黒河内與四郎

第一期　太古より王朝の中頃に至る（續き）

我が國の古代は、一夫多妻の風習なりしも、猶、且、婦人は、一夫に事ふるを以て、貞德の主要となしたりしことは、前號に述べたるが如し。されば、貞女、二夫に見えずてふ庭の訓は、既よ、早く、支那の經籍渡來以前よりの事なりけり。そもく、貞女、二夫に見えずてふ語に就きては、世に、種々の論あり。或は、此の説を是とし、或は、之を非とす。予も、亦、必、二夫に見えざれとは言はず。只、其の婦德に反せざることゝ、家族の關係とより、其の去就を決せよとと言はんとするなり。さて、又、當時は、一夫多妻なりしとはいへ、他の諸國の

野蠻時代の如き亂雜なるものにあらずして、やゝ、秩序ありたりき。即、其の一人は、正配にして、頗、權を有し、其の他は、稍下りて、殆、姉妹ほとの差ありけり。されば、後世の正妻と、側室との高下ほどにはあらざりしとぞ。斯くて、一夫にして、多妻に逢ふも、大方は、其の妻をば、己の家に迎ふるにはあらで、夫たるもの、其の妻の里家に通ひしなり。蓋、一夫多妻の、能く行はれし故由とぞ思はるゝ、予は、是を以て、我が國文化の程度、並に、女德の一端を推知する助となさんため、茲に、一言することゝはなしぬ。

第十二代景行天皇の御時、皇子日本武尊は、東夷征討の命を奉じ給ひて、住み馴れ給ひし都を出で立ち給ひ、相摸國に至り、海に航して、上總國に渡らんとし給ひけるに、暴風、俄に吹き來りて、御船覆へらんばかりなりしかば、御妃弟橘

姫は、是、海神の、崇をなし給ふならめ、いでや、妾、御身に代はりて、海に入り侍らんと宣ひて、海底に沈み給ひきとは、古史の傳ふる所なるが、是、夫の爲に、其の身を、犠牲に供せさせ給へるものにてありけり。蓋、夫に事ふることに就きて、婦人の德操のある所を知るに足らん。されど、本誌を讀まるゝ孃等よ、死ぬるのみを以て、夫に事へ、はた、父母、其の他の人に事ふる惟一の婦德とは誤認し給ふな。死を全くし得る限りは、艱難辛苦を忍び、良人を助け、父母を慰め、萬止むを得ずして死ぬればこそ、其の死を得たりと云ふべけれ。弟橘姫の死の如きは、理論より云ふ時は、死ぬべからざるに死に給へるが如きものなれど、當時の狀態よりすれば、死ぬべき時に死に給へるものとぞ云ふべき。

又、女子に、專制の權なかりしことは、既に、遠く、太古にあることなり。其の

例を示さば、天孫瓊々杵尊、木花咲耶姫命に御出で會ひ給へる時、尊は、直接に、姫命に向ひ、己が添臥しになり給ひてよと宣ひしも、姫命は、諾否の返答も成し給はで、妾に父あり、大山祇神と云ふ。之に就きて、御尋ねあれかしと答へ給ひけり。是なん、自由結婚の行はれ居らざりし證據にもあらんが、予が、茲に、之を掲ぐるは、女子に、專制の權なかりしことの證となさんためなり。さて、女子は、斯く、專制することなく、父母長者の許を得る事になり居りしは、家庭教育の致す所にして、すべて、謙讓柔順を以て、婦德となしたりしことを知るに足る。

以上掲げ來りたる證例によりて、太古は、男尊女卑の風習にして、謙讓恭敬を以て、婦德とし、且、人の妻たるものは、一夫に事へて、貞順を守りしことの一

班を知り得られん。是、皆、家庭教育の、婦徳を重んぜしに原由するものとこそ思はるれ。されば、是よりは、男尊女卑の風なりしも、無下に、女性を輕蔑したるにあらざりしことを一言せんに、天祖天照大神は、女性の御身を以て、六合に照臨したまひしこと第一例、刀自てふ婦人に對する敬語は、早く、上代よりありて、戸主と云ふ語の縮約なりしこと第二例、女子にして、一家族の長たる地位にありしもの、神衣媛、阿邪爾那媛、五馬媛、速津媛、神夏磯媛等、數多ありしこと第三例、並に、一天萬乘の尊位に居たまひし仁徳天皇が、皇后を敬讓したまひしこと第四例、等を見ても、男尊女卑の、甚しき懸隔なかりしことを知るを得ん。是、皆、婦人の徳操、高きの致す所にして、若、婦人より見るべき徳操なかりせば、剛強なる男子、いかで、婦人を敬する、此の如くなるべき。必竟、婦人が、自招ける幸

福たりしことにてありけり。是より、世も、漸次降りて、社會の有樣も、追々に進歩し來り、從ひて、一般の人心、敏捷となりてよりは、上古敦朴の美風、次第に減じたりしが、未、婦德は、左程には衰へず。沈着にして、恭敬、已を持し、孝貞を以て、身を率ゐ、寧、才智の缺くるあるも、德義の充實し、世人をして、婦德を非難せしめざらんことを期したるものゝ如し。斯くて、中古の中頃までは、此の風なりしが、いつしか、才智を重んずることゝなり、婦德は、衰頽に傾くことゝはなりにけり。當に、第二期に於いて論ずべし。

正誤　前號本論中の五丁五行目「其の」は「其は」の誤　仝七行目「成すこころ」は「成すところ」の誤なり

かぞいろは　あはれともみよ　つばめすら
ふたりは　ひとに　ちぎらぬものを

女子處世論（二）

三輪田眞佐子

第二　道德的の生活をなすべし

世の、生きとし生けるもの、各、固有の天性を有つめり。見よ、翼あるものは、飛ぶ性あり、鰭あるものは、泳ぐ性あるを。人は、生まれながら、惻隱、羞惡、恭敬、及、是非等の心を存するものなれば、何ぞ、道德を離れて生存し得べき理あるべき。若、人、道德を離れて生存せんと欲せんか。恰、鳥の、空を去り、魚の、水を出でゝ生活せんとするが如し。されば、人は、老若男女の區別なく、須臾も、道德を離るべからざるものなり。殊に、女子は、天性、感情よ富み、天職、調和を主となすべきものなれば、自、人界にありて、道德の淵源たらむことを以て、任務となさざるべからず。史を繙け、されば、必、知り得む、女子の、道德を實踐せ

し時代の風俗は、有情、勤勉、正直なりけむ、之に反し、道德を躬行せざりし時代の風俗は、殘酷、惰弱、邪惡なりけむ實跡歷々たるを。

熟〻宇宙間に住める萬種の動物を見るに、悉、身を保護せんための器關を具へ居らざるものなし。鷹に爪あり、牛に角ある如き是なり。而して、人間の、他の動物に對する保護器は、智識ならむも、人の、人に對する保護器は、道德にやあるらむ。幸に。此の道德あればこそ、老人も、青年と共に生き、小兒も、大人と並び存し得るなれ。況して、女子は、其の氣質、柔和、其の體骨、婀娜なるを以て、無形なれども、然も侵すべからざる道德を備へて、其の身を保護せるにあらざれば、何ぞ、枕を高うし得らるべきものかは。實に、情は、人の爲ならず。情深き女子は、必幸あらむ。若、女子、男子と交はることもあらむには、梨下に、冠を正し、瓜田

に、履を修めんが如く、疑はれ易きを以て、一言一行たりとも、道德に違ひなば、忽、禍を招かん。試に問はん。女子の、道德を琢かずして、殃を免れしもの、世に幾人かある。

天は、外事を行ふ男子には、外事より來る樂を與ふるものなり。されば、內事を勤むる女子にも、亦、內事より起こる樂を與ふることを欲せざらむや。乃、女子、「神無月時雨ふるにもくるゝ日を君まつほどはながしとぞ思ふ」と、親を慕ひ、「愚さのおやに似よとは思はねど教へおかるゝ子のゆくへかな」と、子を愛し、「わがせこは物な思ひそ事しあらば火にも水にも我なけなくに」と、夫を思ふ抔、女子は、專、道德を行ふを以て、樂となさば、好し、肉體の辛苦は、多少ありとも、內心の愉快は、間斷なかるべし。凡、人は、憂苦のみ、眼前に踞るとせば、焉

ぞ、生を願ふものあらむ。然るに、女子は、千里にして、喪に走らず、唯、閨門を以て、其の乾坤となし、往時の婦女、尚、生を樂しみたりし所以のものは、精神の快樂多きを以てなりけんかし。嘉肴ありと雖、食はざれば、其の甘きを知らずとかや。今日、女子の世界は、單に、苦慮の世界なりとのみ思ふ人は、未、女子は、道徳を行ふより、無量の快樂を受け得ることを知らざるものと言はざるを得ず。蓋、富貴たりとも、道徳を重んぜざる女子は、口は、食に飽き、目は、花に倦めるを以て、反りて、無聊に苦しまん。貧賤たりとも、道徳を行ふ女子は、其の樂、永遠盡きじ。子曰、仁者壽と、さもありなむ。女子に、道徳の重んずべき理由、斯くの如く、大なりと雖、道徳のことたる、理論上は、兎まれ、角まれ、實際上、一朝一夕に躬行し得んこと難きのみならず、道徳實行の果

報は、唯、一時に止まるべきものにあらざれば、女子は、必、心して、道徳と、自分との關係を講究せざるべからず。おのれ、今、女子の生涯を、其の思想の變遷、及、境遇の異變より、第一無我、第二有望、第三實歷、第四末路の四期に區別し、以て、道徳と、如何なる連絡を有するかを論ぜん。

第一　無我の期とは、幼少にして、未、一定の習慣、及、定見なきときなり。されば、素絲の、或は、黄になり、或は、赤くならん如く、惡友と交はらば、惡女となり、善訓を受けば、善女となり得べし。故に、此の期に於いて、善良なる習性を作らざるべからず。若、猥褻卑俗等の邪惡なる風俗に染ましめなば、先入、主となりて、如何ともする能はざるに至るべし。古人歌ひたりき、「手枕のすきまの風も寒かりき身はならはしの物にぞありける」と。實に然るものぞかし。

第二　有望の期とは、血氣盛にして、然も、經驗なきより、自は、天にも登り得むと、望のみ多きときなり。されば、自思ふならん、妾、異日、斯々の人に嫁し、斯々の事業を果し、以て、功名を顯さん。將、家風をも斯々なさん抔と。妄想のみ、千端萬緒なるべし。此の期に、道理を實踐せざる女子は、自由結婚とか、獨身自活とか、或は、舅姑別居とか、輕忽の言語を放ち、醜聲を釀し、遂に、一身を過り、老後の愁歎を作るに至らん。誠に、今日、青年女學生の戒むべきことにこそ。

第三　實歷の期とは、嫁して、舅姑を養ひ、良人に事へ、一家を保ち、及、兒子を育つべき、最肝要のときなるを以て、若、此の時、道德を守らざる女子は、舅姑を安んじ、良人を助け、兒子を訓へ、婢僕を御すること難かるべし。即、家風

奢侈に流れ、不義に陷り、良人、酒色に耽り、兒子、放蕩ゝ染まんも、家の裡を修むる女子、有德の動作をなさざるより來る例少からず。あはれ、累卵の危き行爲をなして、泰山の安き立命を願ふものは、惑へるの甚しきものにぞある。

第四　末路の期とは、年老いたるときを云ふなり。年老いて、道德を知らざる女子は、露命、旦夕に迫れりと恐れて、心を惱ますこと少なからざるべし。是、神佛ゝ、道ならぬ祈禱をさへなすときならん。亦、彼等は、富貴なりとも、身に、德望を具へざるを以て、其の富貴を利用し、眞正にして、高尙の樂をなすこと能はざるべし。況、貧賤なりせば、憂苦、譬へんにものなかるべし。否、良人ゝ離れ、愛子に死なるれば、如何ばかりか悲しまん。されど、有德の女子は、恒に、心中、綽々たる餘裕あれば、如何なる事變に逢はんも、非道の恐怖はあ

るまじ。孔子の、五十而知天命六十而耳順。とは、有德の人にのみこそ見るべけれ。

第三　智識を要す

人、能く、大象を役し、大魚を捕らへ得る所以のものは何ぞや。曰はく、筋力、彼等より勝ることあらず、唯、彼等、人より、智識少ければなり。されば、人、智識を以て、世に立つにあらざれば、身を全うすること難し。殊に、女子は、體質輕弱なれば、智識によるにあらずば、身を安んずること能はじ。

女子の、世に立ち、失敗することの多きは、主として、智識の乏しきに由るならし。例之ば、女子の、良人を撰ぶに、目前の榮華に迷ひ、將來の利害を考へで、後悔をまねき、既に嫁せし後は、舅姑に譴責せられ、婢僕に愚弄せられ、遂に、良

世に立ち、失敗することも

は、女子の、良人を撰ぶに、目前の榮華に迷ひ、將來の利害を考へで、後

嫁せし後は、舅姑に譴責せられ、婢僕に愚弄せられ、遂に、良人を失ふも、多くは、智識の足らざるに基くめり。況、智識なき女子は、胸襟狹きを以て、些少の事體を、尊大に思ふより、多言に流れ、諸行を判定するに、僻見の心を以てするより、嫉妬に陷り、施いて、女德を傷ふに至るべし。但、男子には、建業的智識なきより、立身なす能はざるもの多からんも、女子には、守成的の智識なきより、失敗するもの多しとぞ。若、上述の如き失敗なからんと欲せば、是非、幼より、學問に志し、世路難に堪ふるに足る智識を養はざるべからず。其の智識を養はんには、第一、女德學を修め、親子は、如何なるものなる乎。夫婦は、如何なるものなる乎。且、女子の本分は、如何なるものなる乎を知るべきなり。されば、家族は依賴し、良人は信托し、他人も風靡せん。因に云ふ、おのれは、女子教育には、德育を以て、立世に樞要

の智識を與ふるものとして、反りて、他の智識をば、才藝となし、以て、女德を助成せしむるものに過ぎずと考ふるなり。蓋、こは、おのれが私言ならむ。讀者諒せよ。第二、實用の智識を養はんため、裁縫、讀書、習字、數學、生理、衞生、及、料理等の學科を研くべし。第三、稍、高尚なる女子たらんと欲せば、古來、世の治亂、人の榮枯せし原因を探らん爲、歷史を學び、世界の大局を知らんため、女性的の文學を修め、及、畫學、音樂等より、優美の思想を作らんこと肝要なり。惜哉、目下、女子の父兄たる者、女學の振はざるを見て、以て、女子は、學ぶも、到底、甲斐なきものならん抔と、一時の風潮に迷ひ、遂に、愛女の、將來、立世上に起らん利害得失を考へざるもの多し。「わりなしや人こそ人といはざらめみづから身をや思ひすつべき」とは、紫式部の歌なり。今日、能く、身

を、世に處せんと思ふ女子は、式部の心を以て心とせね。殊に、おのれが、大に感ずるものあり。そは他なし。藝は、身を助くるてふ一事なり。抑、万丈の峯巒も、時ありて崩るゝ如く、巨萬の家財も、永遠消えざるものにはあらじ。故に、何ぞ知らん。今日、蝶よ、花よと、榮華に暮らすものは、明日、赤貧洗ふ如き境界に陷るなからんを。將、夫を、天と恃み、偕に老いんと誓ひてしに、世路渺邈、唯、吾、獨、存すと歎かん時なきを。或は、柱礎と便りし子も、母に先ちて、黃泉に入りし例も少なからず。斯の如きときに於いて、讀書、裁縫、若くは、美術の藝だにあらんには、期せずして、身の救はるゝものぞかし。おのれ、茲に、おのれが實歷を披露せばやと思ふも、不敬の譏を恐れて省きぬ。

されば、女子たるものは、事情の許す限り、勉學して、何なりとも、身に、藝を備ふべし。唯、恐らくは、其の年老い易く、其の學成り難きを。故に、能く、世に處せんと願ふものは、夙に、必要の智識を養ふは勿論、特別の一藝を學ぶべきことにこそ。

さて、處世には、才藝を必要なりとするも、道徳の必要なるには若かず。抑、男子は、陽性なれば、從ひて、其の天職も、積極的の事業多かるべきも、女子は、陰性なれば、自、消極的の行爲多かるべきなり。例えば、經濟に就いて云はんにも、女子は、進みて、成産を謀らんより、退いて、節儉を守るべし。徳行に就いて云はんも、出でゝ、社會の害惡を撤せんより、入りて、家内の不善を戒むべきなり。然るに、概して、區別せば、才藝は、悉、積極的のものにして、道徳は、消

極的のもの多し。非禮見る勿れ、非禮聽く勿れとの類是なり。されど、孔孟の學派のみ、消極的の道德多しとな誤りそ。

元來、道德は、先、己を愼みて、後、他に及ぼすべきものなり。されば、克己復禮の如き消極的のこと多きは、自然ならん。是を以てにや、佛法にも、布施、持戒、忍辱、精進、靜慮、智慧を、六度とて、主眼の敎となすめり。乃、進みて果すべき積極的の敎より、退いて守るべき消極的の敎多きこと明なり。是、おのれが、陰性の女子は、智より、德を重んずべしと云ふ所以なり。されど、おのれは、決して、女子は、積極的の善行をなすに及ばずと云ふにあらず。唯、行爲の順序を示すのみ。

當世の女子は、明治昌平の文化に伴ひ、新奇の學說を聞き、巧妙の事物を見得

るより、勢、德川時代の婦女に、其の高尚なる智識は勝らんも、實際、處世に必要なる智識は、反りて劣れりやも知り難し。如何となれば、彼の時代は、いろはだにも知らざる婦女多かりけれど、嚴重なる家庭教育より、以心傳心の法を以て、樞要の智識を、實地に得べかりければ、單に、文字に由りて、家政を學び、育兒を習はんより、大に熟練し得べければなり。おのれは、今日、青年の孃達の、口、能く辨じ、筆、能く述べ能ふ理論上の智識のみを養ひて、處世に必要の智識足りぬと誤るものなきかを恐る。斯く論しなば、或は疑はん、學問は無用なる乎と。否々、文明の世に處し、文明の生活をなさんとならば、必、學問を研究せざるべからず。思ふに、昔日の婦女は、懸隔甚しかりけるを以て、下流のものは、いろはだにも知らざる情體なりけんも、上流のものは、學問遊藝は云ふに

及ばず、武術さへも學びたりしを以て、上品なる智識を具へたること、現今婦女の及ばざる處になんありける。吁、斯く、天下に有識の母ありたりければこそ、大和魂を奮はしめたりけれ。今の婦女、往時の婦女とし云へば、悉、蠢愚にありたりけんとな思ひ誤りそ。試みに、異日、武家風の婦女に就いてものせん。おのれが、以上、往時の女子は、いろはだにも知らざるもの多かりけんと云ふは、下流の婦女のみを指すなり。あはれ、明治の女學生とて、物質上の學問に眩惑して、精神の學問を養はずば、德川のいろはだに知らざりし田婦織女に恥ぢざるを得んや。希はくは、諸孃、學の窓にある時より、恒に、何をか、處世に有益なる智識なる乎と考へて、往時の上流婦女にも勝らんと勵まんことを。

史談

おいえ、長兵衛

塩井雨江

今様の人は、土塊を焼きて造りたる煉瓦石とかいひ、をかしや、猿の顔の如き、赤き色したる石を、積みかさねたる高楼の上、玻璃とやらむ、硝子とやらむ、グラスとやらむ、名をきくだに、何となう笑止なる、奥もすきて見ゆる窓の内、犬じものなる獣類の毛もて造れる床を敷き、をかしや、四脚の椅子により、四脚の寝臺にうちくつろぎ、牛の肉、豕の肉、小刀にて裂きむしり、匕にさし貫きて、つかみて喰はむせかりのさまして、男は、衣服も、手は手のまゝ、足は足のまゝなる形に、毛の織物もて包み、女子は、腕など胸など、あらはにさらして、腰のあたりのみ、七面鳥といふ鳥の尾の如き姿つくり、頭には、馬の足首の如きもの打ち結び、顔には、網うち張りて、恐ろしげなる口をいましめ、手を握りて迎へ、口を吸ひて別れを告げ、太く逞ましき青駒に跨らすとも、黒色燦爛たる馬車に御するやうの事すれども、誠に進歩したる人、上もなく高尚なる人、はてもなく貴き人なりと、自らも思ひ、

他人も然りと心得たり。

杉の黒木の柱細く、藁の草屋の軒低く、見るかげもなき小屋、張りたる草紙も、破れたる窓のうち、草のむしろの、腐れたるを敷き、荒栲の布の衣の、色もなくつやもなく、袖もこゝかしこ裂け、裾もこなたかなた、大かた破れたるを着、炊ぎたる粗穀、菜草を食ふ人を見れば、誠にいやしき人なり、下もなき下等の人なりといふ。今様の人の、貴きといひ、いやしきといふは、大かたかゝるさまをいふ。今更に、いはでやみなむと思へど、思へば、また默し難きは、今様の人の腐れたる眼、あさはかなる心なり。世に貴き人といひ、世にいやしき人といふ、彼れも是れも、皆心をこそいふべきなれ。何事も心こそ種なれ、形は枝葉なり、形は唯に心の宿りのみ。心消ゆれば、形もまたむなしき殻なり。心といふものの本にて、形といふものは末なり。されば、世の中の人を、よきといひ、あしきといふも、うつくしといひ、醜しといふも、猛しといひ、よわしといふも、勇ましといひ、おくれたりといふも、かしこしといひ、愚なりといふも、尊きといひ、卑しといふも、皆心の德をこそ、本とせめ。形といひ、姿といふものは、末にこそ置くべきなれ。

されど、よしや腐れたる、汚れたる、低く、さゝやかなる家に住み、色もなく、香もなく、汚く醜く卑き形をしたりとて、心だよ、清くうつくしく、高くかしこくあらば、誠にかむばしく、うつくしく、めでたく、ゆかしく、尊き人といふべく、よしやあでにうつくしく、高く大やかなる家に住み、錦に黄金に白玉に、かゞやくもかりの形したりとて、心の腐れたる、汚れたる、低くいやしき人ならむには、誠に、石や、瓦や、土塊や、見るかげもなく、汚くいやしき人といはむのみ。

かゝれど、人の守るべき所、磨くべき所の本といふは、心の徳なり。心の美なり。心の品格なり。容姿の美、衣食の美、才藝の美は、守るべく磨くべき所の末のものなり。さるを、今様の人は、此の本を忘れて、末をのみ志すからに、人の貴き賤きをいふにも、末なる形の貴きをのみ見て、本なる心の貴きを忘れたり、げに、世は濁りはてたり、汚れはてたり。笑ふべく、泣くべく、口惜しきかぎりなるは、十九世紀の世の中なり、今更にいはでやまむと思ひしが、又思へば、後の世の母ともならむ岩井水の清き女兒、花の蕾のやさしき姫上もあらむに、さらむ令嬢の、此の十九世紀、濁流みなぎり、塵芥うづたかき世の中に、溺れず靡かず、誠に貴き女子と

いふものを知り誠に貴き母といふものを知り玉はむよすがにもなれと思ひて、宮城野信夫、大姫、夜叉御前、大野きさ子、鈴木のぶ子、紅梅内侍、勝子など、おのれがあげ來うし孝女貞婦、いづれも上もなき尊き女子、尊き令孃の鑑なり。今また古事要略、今市物語、野史などいふ書よみたるに、又上もなき尊き姉弟を得たり。

姉の名は、おいまといひ、弟は長兵衛と呼びぬ、徳川の幕府、三代將軍の世、寛永といひし頃、大和國葛下郡といふ郡の、今市村といふ村に住みたるものなり。父母は貧しき商人、家は、げに田舍の野末、むぐらはふ草の藁屋、おいまも長兵衛も、此の見るかげもなき草の庵りに生れ、此の貧しき父母に、はぐゝまれぬ。されど、花は、野末にあるも美しく、月は、山の端にあるもあかゝりけり。おいまはらからは、此の花なりけり、此の月なりけり。姿は、色もなく香もなげに、やつれたれど、心は美しく、かんばしく、ゆかしかりけり。父にもかしこまりて仕へ、母にもやさしく侍き、父よ母よと右左り、入るにも出るにも、片時はなれず敬ひまつはり、年こそ童なれ、親思ふ心は、大人にも勝りぬ。大かたの童は、花をあつめ、木の實を拾ひ、野山を無上の樂土とをばゆる頃、姉弟は、父の肩を採み、母の腰をさすり、

わが家を、無上の樂土と成したる心こそ、尊き限りなれ。

世に孝子、忠臣、貞女、節婦などいひ、尊き人といはるゝものは、幸なくあはれなるが多かり。父を思ひ、母を思ひ、余ある事も忘るゝばかりのおいま同胞、父の面、母の姿ならでは、此の世に、うれしきものもなく、樂しきかげも無く、父母を、わが命わが玉の緒とばかり思ひて、起臥したるおいま同胞、あはれや、母なる人、ふと病つきて、魂魄何處を慕ふらむ、悲しき孝子を殘し、いとはしき夫を捨て、、むなしく逝きて、又歸らずなりぬ。散りたる母木の落葉もあはれ、殘りたる根ざしの若葉も、またあはれや。

かばかりに、いとはしみたる母の姿、母の聲、最早何時何處、見る時も、きこゆる方も無くなりては、如何なる心地やすらむ。げにおいま同胞は、自からの命に離れ、自からの玉の緒も絶えたらむばかりの心地にて、母の亡骸に取りすがりて、唯生体あく泣きくづれて、体も涙となりて、とけやせむばかりに見ねしといふ。

昨日までは、思ふこともなかりし天も、けふは何となう、はてなさの眼にとまり、何とも無き雲のゆきゝも、はかなさの心にかゝり、常に見る野邊のけぶりも、特更

にけしきにや立つらむ、おいま姉弟は、起きては、唯つく〳〵とながめてのみ暮し、臥しては、母よし〳〵と夢見て、わこがれてのみあかしける、心の中こそあはれなりしか。

父は、まなく後妻を迎へぬ。おいま姉弟は、亡くなりし母の、かへりしむかりに悦びて、昔にもまさりて、一入やさしう、母よし〳〵と、まめやかに仕へたり。かむかりの孝子、かゞかりの赤心、天地も心ありて動かなむ、鬼神も靈ありて泣かむばかりなるを、何が故ならむ、繼母の心には面白からず、嬉しからず、立てば靜ならずと叱り、坐れば働かずとこらし、母よとまつはれば、うるさしと罵り、父よともの問へば、母を外にしてと誹り、何の憎きにや、姉弟の顔見れば、眼に角立て丶、睨みつけ、われよこれよと、恚りのゝしり、父さへ昔に似ず、情なくつらくなりて、姉弟を、ひごき笞に、こらすこと多くなりけり。されど、おいま姉弟は、恨みもせず、恚りもせず、唯打たるゝ度、のゝしらるゝ度、おのれの心、おのれの行、盡さぬを、かしこまりて謝び、父の打つは、いましめ、母ののゝしるは、敎へとのみ思ひて、益謹み、愈敬ひかしづきし心の中にぞ、尊く上もなく、うつくしけれ。

鬼のむごき心、あらき眼、には、やさしき人の言葉も、切なる人の情も、なか〳〵に憎く嫌はしくのみ見ゆらむ。父と繼母は、おいま姉弟の、ます〳〵切に、まめやかに侍くにつれて、益々つらくむごく、姉弟の憎むやうなりぬ。もと父も繼母も、子といふ者ありながら、親といふ心は無き者なりけり。密に家財を賣りしろなして、姉弟の出でゝ在らざる隙を見、かばかりのやさしき孝子を捨て、住み馴れし家を捨てゝ、繼母の生める子のみを携へて、密に大坂の方へと移り住みたり。人のいふ鬼といふもの、誠に世にあらば、この父この繼母、これや鬼といふものならむ。かばかりすげなく捨てられながらに、おいま姉弟は、父と繼母を捨てがたう思ひて、父上よ母上よ、妾罪あらば、此の身を微塵に裂き給ふとも、恨みは侍らじ、唯此の家をば去らずでや、弟ばかりは捨てでよ。のう父上母上、おのれ過あらば、此の身を、ばら〳〵に斬りも盡くし給はむどて、苦しからず、唯此の家よ歸りてよ、姉樣を捨てずや。父上母樣の側にだに侍らば、此身、兎もなれ角もなれ、惜くも侍らじ、恨みもあらじといひて、姉弟が家に泣き、山に泣き、野に泣き呼べど尋ぬれど、遂に父母の鬼の行衞は、知れざりけり。

鬼をも親と慕ひて、狂氣にもならむばかりなりしを、あたりの人の情ゆゑに、慰められ、おいまは、今市より程はなれたる、竹内といふ里の、何某といふ家の家婢となり、弟は、今市に留まりて、桶の輪入るゝを營みとして、朝夕に削る竹の、細々と暮らしけり。されど、猶、父母の事なつかしく、忘らるゝ暇なく、姉弟が折りふしの行き通ひ、唯問ふ事は、父母の行方知れでかと、姉も弟も、語る事は是れのみなりける。心の中のすなほに、直ぐなる、世の中の中の掟ともなれや。

鬼なりける繼母たちは、密に大坂に移りてより、おいま姉弟のこと、如何にまつらむ、なにとなりけむと、夢にも思ひ出る事なく、露ばかりも心におく事なく、おいま姉弟のなきを、鬼心に嬉しく忍び、いと樂しげに、世を送りたるが、天も鬼を惜まず、人も鬼は憎めり、繼母は疫病に苦しめられて、地獄へや落ちつらむ、うめきて仆れぬ。二人ありける子も、鬼なる母の、共に誘ひけむ、軈て歸らずなり、父一人となりけるが、こも病に罹りて、起居もまゝならず、思ふやうに、助くる人もあらねば、死を待つばかりの有樣なりけり。

人傳に、かくと便りありしかば、おいま姉弟は、且つ悦び、且つ驚き、取るものも

取りあへず、馳せて大坂に到り、父の在家を尋ね、姉弟を、かばかりにむごく、打つ罵りつ、さばかりにすげなく捨てたる父をも、右より左より取縋りて、抱きつかへつして、斯くましますをば、尋ね盡くさざりし罪を詫び、繼母の空しくなられしをも、知らざりし不孝を悔ひなどして、姉弟がはる〳〵父を負ひて、故郷今市の家に迎へ來り、この姉弟が盡くす孝養並々の人の、思ひもよせぬ所。今様のあさはかなる人の、夢にも知らぬ所。

おいまは、終日は、主人の家に在りて、水を汲み薪を取り、炊ぎの業の折りふしは、糸をさへ繰りなどして、ひまなくまなく、まめやかに立ち働き、夕べとなれば、主人に頼みきこえて、竹内よりは數十町もあらむ、今市の家に立ち歸り、父の肩を揉み、背を撫でゝ怠らず。父いぬれば、側に侍りて、父の身體の、さゝとだに振へるを見れば、寒きにやあらむと、夜着を重ね、父が手足の、少しにても動くを見れば、苦しきにやあらむと、夜着を改め、夜更るも、更に眠らず。曉近うなれば、又、數十町の道を、竹内の里に歸り、主人の家の、朝の營みに遅れぬやう、身を捨てゝ、かいく〳〵しく務めたり。

弟は、姉の行くを、必、門まで送りて、自竈を燃き、飯を炊ぎ、納戸の業果つれば、父の乞ふがまゝ、日毎必ず、父を負びて、祖先の御寺へ詣で、又父を負びて歸り、歸りて朝の飯を進め、父はつれど、自らも食し、それより削りたる竹を肩にして、市中を呼び巡り、おのが職業を營み、幾度となく歸りては、父の機嫌を伺ひ、幾度なく、市中を呼びて巡り、夕暮には、又父の乞ふまゝ、必ず父を負びて、祖先の御寺に詣で、父祈れど、自らも禮拜し、又歸るにも、父を負びて、歸れば夕飯をすゝめ、父終れば、やがて自らも食し、食はつれば、父を慰め父を勞はりて怠らず。姉來れど、自らは竹など削り、晝請負し補の舊きを繕ろひつゝ、見つる事、きゝつる事、何くれど物語りて、樂しげにしたり。おいま姉弟は、斯くすること、幾春秋幾十年、積年も一日のごとく、更に懈るけしきなく、其の後、おいまも主家を辭して、唯、益かい〳〵しく、いよ〳〵いそしく、盡くしゝ孝養の年月。父わるを知るのみ、我わる事は更に知らず。ましてや、世の中の月や花や、さるもの、影も知らず、香もおばゑぬおいま姉弟、天地の間に見ゆるは、唯父のみなりけり。一生の中の思ふ事、唯父を思ふ心のみなりけり。されば、

おいまは、六十歳にあまる年月、異なる心を、まじゆるをいとひて、夫をも求めず、身は空しき床を守りて、遂に赤心亂れず、一心に孝道を盡くしてはてたり。かばかりに、やさしき心、かばかりに、めでたき徳、これを尊き人といはずでは、又如何なるものをか、尊きものといはむ。げに、おいま姉弟、身は今市の野末に生れ、あやしき藁屋に人となり、終身荒栲の衣の、色なきをまとひ、終身、自ら薪を取り水を汲み、才學もなく、藝術も覺えざりけり。されど、才學も、藝術も、衣服も、住居も、皆末の末なり。本とする所は心なり。心、かばかり尊かりけり。何處に在り、如何なるさましたればとて、尊き人なり、やんごとなき人なり。寶玉は、よしや土中に在るとても寶玉なり。瓦石は、金殿に置かればとて、瓦石なり。あはれ、尊き妻ともなり、尊き母ともならむといふ岩井の水の淸く新しき令孃たち、花の蕾のやさしく床しき姫君たち、今様の人にならひて、末にのみ流れなせられそ。わだし今様の風にな靡き給ひそ。本なる心の徳をこそ、磨き給ふべきなれ。

瓜生岩子の小傳　　信夫忍山

慈善媼は、岩代國耶麻郡喜多方町の人なり、其の父を渡邊三郞次といふ。文政二年小田付村(今の喜多方)に生る。名は、岩。天性溫和、敢て疾言遽色せず、客を愛し、人に下り、溫良のすがた、恭儉のさま、終日かはらず、故に、人々其の德を慕ひ、はた、如何なる暴漢と雖も、善く其の命を聞かざる者はあらざりけり。十四の年婦女の道を學ばんとて、會津公の侍醫、山內春龍(伯父)の邸に住みけるに、そのほど、此の地方は、古よりの惡弊として、藥、或は、あさましき手だてをもて墮胎し、家族の繁殖をも防ぎぬること、盛に行はれて、人皆之を怪むものなし。山內氏いたく之を憂ひ、あるは、物品を施し、或は、說き諭しなどして、直接に、間接に、その惡弊の矯正に努められたり。而して、其の惡弊風、及、山內氏の嘆聲は、日々媼の耳目を刺衝しけれど、媼は此の際に於て育兒場設置の必要を腦中に印してけり。卽、數十年間の篤行は、その天性に出づと雖、實に、此の時に感發せるにぞありける。十七才にして、瓜生覺左兵門に嫁ぎ、一男三女を生み、三十四の年、不幸にして、良人におくれぬ。是に於いて意を決めて、身を慈善の業に委ね、爾來七年の間、常に三十餘人の

貧兒を養へり。明治戊辰、會津城の陷るや、藩士の喜多方地方に逃れしもの多く、その子弟共の、空しく遊戯にのみ日を送るを見て、媼心に思へらく、かくて打過ぎなば、後日世の笑を受けなんこと必せりとられたみ、學校の設置を思ひ起してき。かくて、良き教師もがなと尋ねけるに、幸して淺岡源三郎(もと日新館の教師)氏の痛手負ひて、某の寺に潛みたりしを、おのが家に招聘きて、疾をつくろはしむる傍、奔走盡力、漸く、一の學館を設け、同氏、及、佐川又次郎氏、外二三氏を擧げて、讀書、算術、擊劍等を教しめ、媼、亦、自、女子に裁縫を教授せり。されど、近郷の兒女に至るまで、來て教を受くるもの多くなりぬ。こゝをもて、媼の喜び大方ならず、館に名づくるに日新を以てし、益、盛大を期したりしに、教師淺岡氏は逃走の故を以て江戸にて謹愼を命ぜらるゝに、媼思へらく、今にして淺岡氏を失はゞ、閉校の不幸を見るも計られず、如何にせんと憂ひに堪えずて、遂に、兒祐三を淺岡と號して、之に代らしめむと決心し、旨を祐三に告ぐ、祐三謹て諾ひ、佐川又次郎と共に、吏原田對馬の許に行きて、淺岡に代らんことを乞ふに許されず、再び關藤右衛門と共に、乞ふも、亦許されず、故れ是を以て、中根某と共に、行きて乞はしめんとしける時、媼祐三

に訓て曰く、もし、許されずと、吏の面前にて屠腹すべし、決して、生て還る勿れと。祐三行く途より歸りて、曰く、余が如きもの死したりとて、許されずんバ、其の甲斐なかるべしと。媼、勵聲叱して曰く、汝も亦人なり、汝死せと、學校は、必ず存立すべしと。祐三奮然行きて又乞ふ、吏其の志に感じて、遂に乞をそ許しける。而して、日新館の盛なりしことはいふべからざるものにて、隨從の弟子の、今は縣會議員に撰バれ、あるは、村長などをつとむるもの、多く出できにしは、全く媼の餘澤に霑はひしものなるべし。かくて、媼か數十年の事業中かくまで勞苦せし事はなかりしと、今も時々打嘆かるゝめり。かく嘆かるゝ程にいそしみて設けられたる學館も、藩主の斗南に遷さるゝの不幸に遇ひ、閉校するに至りぬるは、いと〳〵なげかはしきことにこそ。さはあれ、媼の志は、益、堅く、或は、書を著して人に善をすゝめ、或は、京に出でゝ有志者に訴へ、あるは、地方の富豪に計りて、教育の庭を設け、或は、薄命流浪の徒に、各業を授けて、自活の道を得せしめ、或は、德教の衰頽を慨きて敎會を開くなど、東西奔走、盡力經營、席暖かなるに暇あらず。明治三年民政局より賜はりたる賞詞に、

其方儀小田付村ゟ罷在去々辰年以來右近村へ劃付に相成候婦女子共へ夜具蒲團衣類或は建具等自分才判致し貸渡且小田付幼學所新取建之儀全所出張民政局へ度々申込聞置に相成新に建築し普請料多分入費調達致候而已ならず出席の幼童爲事深切に取扱其外餓死の者共供養の爲施餓鬼等致し候由婦人の噂衆に抽て志操稀成者に付追ては重く被賞方も可有之候得共不取敢爲御褒美金壹兩被下候事

とあり、以て、其の善行の一端を窺ひ知るべし。明治二十年、大に爲すことあらんとして、二三の子女をゐて、この福島町に至り、貧民を救濟し、其の子弟を巳が宅にて養育せり。廿二年洪水、福島地方害を蒙ること甚しく、其の餘波延て物價の騰貴を致し、窮民の困頓飢餓に叫ぶもの多く、漸く來りて哀を乞ふもの、踵相亞ぐ、媼其の慘狀を見るに忍びずて、悉く家財を沽却し、尙足らざる所は、有志家の力を藉り、若干の米穀を得て、其の急を救へり。世路漸く難く、貧民の數は年を追ふて加はり、限りある力を以て、限りなきの貧民を救濟するは、到底なし得べきにあらず、於是熟慮焦思、終に、世間の廢物視せる飴の糟を精製して、食物とするの法を發明しけり。現に、福島瓜生會は、此の食物を以て、日々數多の貧民に施與せり、

いとゝめづらかなる行にあらさらんやは。此の間媼は、千百の障礙を排して、漸く會津の若松、喜多方、阪下の三所に、育兒會を福島町に、瓜生會を若松に、濟生病院(慈善病院也)を設けぬ。又嘗て、棄兒墮胎の弊を杜絶するの法を說き、道德の盛衰は、國家の消長に關することを論ひて、國會議員を促せるぞをゝしきや。廿四年三月東京養育院より聘れて、幼童世話掛長となり、專ら心を兒童の養育に盡されしが、其の五月歌舞伎座に開かれたる、慈善會にて、香川皇后宮大夫に謁したるに、大夫云けらく、汝嘗て、牧野伸顯氏を經て獻りたる、飴糟製の菓子パンは、同氏の添進せられし、汝の傳記と共に、おのれ捧て以て、御前に奉りしに、畏くも、皇后宮御躬ら御一覽ましく〱、岩は、多年一日の如く、窮民の救助に盡力せるのみか、廢物を以て、かゝるめでたき食物を製ることを發明したるなど、其の赤誠感ずるに余りあり、以後益努めよ、折もあらば、岩にかく傳へよとの、ありがたき大御言ありし由を傳へられき。其の後ほどなく、御衣及菓子等を賜りたり。あはれ、東奥の一婦にして、　皇后宮の令旨を蒙り、且　恩貺を忝うするに至るは、其の平生の誠心、遠く九重に達するにあらずば、いかでか、よく此に及ばむ、思へば、畏きことにこ

そ。媼節行を嘉せられ、賞詞賞與を賜はりたること、前后数十回、かれ、媼が一朝慈善に志してより數十年、終始一日の如く、いかなる艱難に遇ふと雖、少もたゆむことなく、屈することなく、家財の蕩盡を患ひず、只、博愛の衆に及ぼざらんことを患ひて、事に此に從はれたる、拮据盡瘁勞苦の狀、實に、言語のよく盡くす處にあらざるなり。其の平生已れを奉ずる極めて儉に、結髮するに油を用ゆることなし。推して而して其の他を見ぞ、百事をのづから知らるゝならん。媼本年六十五と雖、猶、矍鑠として壯時に異ならず、今福島瓜生會に起居して、慈善の業に從へり。

漫錄

歌の話

高崎正風

歌は、實地實情より發し來るところの、咨嗟詠嘆の餘韻なれバ、實地にそむき、實情に反したる時は、いかにたくみなりとも、歌の範圍外に脫出したる漫語に過ぎずとは、平素予が口を開けぞ、之を説き、筆を執れぞ之を述ぶる所なり。

然るに、之を説き之を述ぶる予にして、自ら此範圍外に脫出したる歌を詠じ、毫も其點に心付かざ

りしは、不覺とやいはむ、疎漏とやいはむ、甚慚愧の至に堪へざる次第なり。

昨年九月、本會に於いて、催されたる、各評のうち、秋時雨といふ題にて、

　秋更けて蕎麥生花ちる朝風にしくれそめけり山のへの里」といふ歌を詠出したりしに、其翌十月十八日開巻になりたるを見れバ、夫々點數の多寡差等ある中に、予がこの歌も、二三會員の點を得て、賞賛の詞をさへうけたりき。さて予自らも少しく詠得たりなど、打喜びしたりがほに、人にかたりもせしに、豈圖らむや、この歌、即、實地にそむきたる歌ならむとは。

十二月九日に至り、予が友人、羽後國秋田の老農、石川貞直通稱理紀之助氏より、左の如き書面到來したり。

前畧奉申上候も甚恐多き事に候へども思付候事は伺ひ申さゞるも却りて恐入候儀と奉存候間内々奉伺候此程興風會誌各評中に蕎麥生花散ると申す尊詠御座候かく申候而も可然哉そばは花の散らぬものにて菊の如くしをれつきて實を收むる時に打落し候者に御座候年來凶荒の備に粮ものを製する研究中此花を食ひ候事發明いたし試驗中に候につき乍恐御伺ひ申上候もし梅櫻の如く散るものとの思召に候へど相違いたし候故一應御伺旁申上候就而者他言は申さず内々にて奉申上候御一覧の上は此狀御火中被成下度奉願候云々

予は、此書面に接して、實に一たびは、驚き、

一たびは喜びたり。抑、何を驚きたるか、實地實く地と稱道する予にして、自ら實地に反したる想像を以而詠出したるに驚きたるなり。抑、何を喜びたるか。予に過われぞ、必、之を忠告する益友を有せるを喜びたるなり。予は、直に、左の答書を裁して、深く其厚意を謝したり。

前略偖與風會各評中そバふ花ちるといふ愚詠御覽ありて懇に御示し下され御深切の段と身に染みて忝く何共感謝の至に堪へず候小子も實地をはなれざるやう實情にそむかざるやうにと平素人にも教へ自らも心掛け居ながらかの薔薇の花のうち見たるところいかにももろきやうにて風にふかれてちりなむにはさも雪のごとくならむと想像せしより深く其實地をそきはめずよみいでたるに誰一人これをあやしむものなきのみならずよしとほむる人さへ有ればおのれもよみえたりなど思ひをりしよはからざりき實地は全く之に反して梅櫻の如く散るものにあらず菊のごとくしぼみたるまゝ固着して實をむすべる後までも落ちざるものならむとは實に不覺赤面の至に候もし老兄の忠告なかりせばしたりがほに人にもかきてわたへ家集にも存じて笑を百世にのこすべかりしを老兄はこの道にあつきと小子をすてたまはざる御厚德とによりて早く過を知る事を得之にすぎたる幸あらじと存じ候明治十五年頃の事なりき京都なる村山松根氏が物故せしとき「たゞひとり殘る都の友千鳥いつち

いにけむ聲の聞こえぬ」といふ歌をよみておくりたりきそのころ氏の遺稿ゑじまの浪を出版するにあたりて此歌をその跋文の末に加へてよと氏の嗣子某よりこひおこせたるまゝにかきておくりけるに當時の新聞紙上に何人ともしれず匿名にて痛く之を非難して曰く友千鳥と三の句にあれど一首の上に千鳥の縁少しもなし云々とありけるを小子の門人故香川景敏大に之を怒り妄にわが師の歌を非難する無禮なるものなりとて其新聞紙に自らかきたる辯駁書をそへて小子に示せり小子見て嗚呼なるわざな爲そこは全く予のあやまちなりきげにさることには心づかざりしをよくこそをしへくれたれとて直に「かも川にひとりのこりし友千鳥」とあらため巳に彫刻も出來たりし跋文をかきかへしことども候ひき常にこゝろがけ居候こともやゝもすればふみはづし候事ありて甚慚愧に堪へざるなり向後もをりふしかゝるあやまちすくなからざるべく候へば御心付のかどはすこしも御斟酌なく御教示下され候やう深く希望いたし候大かた世間の人はかげにてこそかれこれ批評すれ直接に忠告いたしくれ候者は絶えて無之常に慨嘆いたし居候處老兄にしてはじめてこの直言を承はり實に望外の益を得たりと申すべくかへすがへすもよろこばしき限に候此段あつく御禮申上候又申すその萎花を備荒の食料にあて候やう御研究中のよしいよ／＼好結果を得候はゞ農

家の遺利を拾ひ功益鮮少ならずと存候老兄の農事に熱心なる嘆賞の外無く候來年二月與風會の發會には此度往復の一條をのべかの歌選拔せし會員にむかひて小子の過を謝し老兄の好意を披露し併せて一般の注意を喚起せむやと存候間其折の材料に右のそばの花一撮はと御惠贈下さるまじくや願試み候

この後、程なく、右の蕎麥の花を送りおこせたり。いまこゝに携へ來りしもの、即是なり。實にこの石川貞直子は、農事に極めて熟達したるをもて、先年農學上諮詢の爲、農商務省の招聘に應じて、上京せし事もある人にて、兼ねて、歌の道にもいたりふかく、伊東祐命氏存生中は、これにつきて研究し、當時は、小出粲氏につきて、絶えず勉學せりとぞ。

歌をよみ歌をまなぶものは、朋友相互に直言忠告をいれて、研究せざれば、終身おのれの過失病癖を見ること能はずしらず／＼退歩卻行して、遂に、道の蘊奥をきはむることあたはざる可し、なにとぞ、歌をよみ歌を學ぶものは、誰もこの石川子のごとくありたし。

桂園翁が、歌は、よくよむことのかたきにあらず、これをえることのかたきなりといはれたる、げにさることにて、各評のごときは、歌をよむよりも、歌をえらぶかた難しといふつべし。歌を選ぶに苦心すれど、即、歌をえるといふ點の研究となるなり。本會に於いては、幸に、春秋二回、この各評を催さるゝことなれど、會員諸君、深く、此選拔

をつゝしみたまひて、いかなる歌なりとも、實地實情にそむきたる、予が蕎麥生花散るといふ類の歌ならば、決して點を與へられざるやう注意あらまほしきことなり。

この談話を聽きて　小出粲

なかなかに清き心のみゆる哉
語りちらしゝそむきのはな

あうむ文學（四）

楢の舍主人

金葉集と諸家の批評及難陳

金葉和歌集は、自河院御讓位の後、崇德天皇天治元年、源俊頼卿院宣をうけたまはりて、撰集に從事し、大治二年上奏す。然るに再度の奏覽も、叡慮にかなはず、第三の度に至り、中書の草案を見そなはし給ひて、漸くをさまることを得たり。その本の卷頭には、貫之が、吉野山みねのしら雪いつきえての歌なれど、これは世に披露なし。通く流布せるは、第二度の本にして、卷頭のうたは、六條顯季卿の、うちなびき春はきにけり山川のいは間のこほり今日やとくらん、なり。などやうに袋の册子には記せり。然るに、今鏡には、俊頼のきみ、金葉集えらびて奉りたりけるに、はじめに、貫之、はるたつことをかすかのゝといふ歌、その次に覺雅法師とて、入りたまひけるを　貫之もめでたしといひながら、三代集にもれ來て、あまりふりたり。覺雅法師も、げにともつゝきおぼえすなど、

仰せられければ、古き上手とも、いるまじかりけり。又、いとしもなくおはしめす人、のぞくべかりけりとて、おぼえの人をのみとりいれて、つぎのたび奉りけれど、これもげにともおぼえずと仰せられければ、又つくりなほして　源重之はじめにいれたるをぞ、とゞめさせたまひけるは、かくれて世にもひろまらで、中たびの世にはちれるなるべしとあり。北村季吟は、この説、貫之の歌かはれり。いづれかいづれともいひかたき中に、袋草子の説は、まさしく、金葉集同時の人の説なれば、違はずや侍らんといへり。されど、袋草子なる吉野山の哥は、その實、貫之にはあらずして、重之の歌なり。今鏡なる貫之のは、最初奏覧本卷頭の歌にして、第二度の本は、何とも記さず。最後のは、重之とせり。この兩説を對照して考ふるに、最初の卷頭は、貫之の春立つことを云々、第三度は、重之の吉野山云々にして、第二度の顯季卿卷頭の本が、今に流布せるなれど、兩書の所説、更に撞着せるにもあらざるなり。袋草子のも、貫と重と字形の相似たるより、書寫を誤りしなるべければ、初は重之とぞ記されたりけん。さらむ、季吟の説ぞ誤なるべき。

金葉集に於ける、諸家の觀察はいかに。古來、この集に對して批評を試みたるもの、一にして止まずと雖も、概、偏見に失し、貶毀の一方にのみ傾きたり。まづ藤原基俊朝臣は、すべて金葉集には、ひがことゞもありて、やう／＼の名ども付けて沙汰せられたまふなり。あまたの名の中に、式部大

輔なりつねと申すものひぢつきあるじと名づけ申すなり。えせ集といふ心なりといひ、更に一歩を進め、時人の口を籍りて、例の罵詈的筆法を以て、人身攻撃にさへ及びたり。そは、此君は、事のたとへに、かなのえ文字をだにも知りたまはぬ人の、さしよるものゝなき家にて、只一人うつぶして、えらび給ひたれば、ひがことおほきなめりと時の人申しあへり、是は、心せばく、われ一人してえたりといはんとて、え損じたまへりとぞ、人々は沙汰しける。といへる基俊朝臣の心事こそ、誠に憐むべきことの限なれ。「何となれば」かれその才學に驕り、天下獨歩の歌人を以て自許すものから、卿を遇すること、極めて冷淡に、極めて非禮に、卿を擬するに、乳臭男兒を以てすと雖も、名望最盛に、詠歌に巧なる、卿と肩をならぶること能はず、憤懣にたへざるもの、嫉妬となり、嘲弄となり、一意、卿を貶すにつとめたればなり。心せばく、われ一人してえたりといはんとて、などいへるは、院宣を蒙らざる遺憾より出でたる囈語にして、頗その妥當を缺げり。然るに後世、彼れの毒舌に惑はされて、公平の觀察をなす能はざるは、笑止千萬とやいはまし。順德院は、後拾遺金葉のころ、後ざまの歌、おほく平懷なる體なれど、ぬけてよき歌はまたおほしと許したまひ、鴨長明は、金葉集はわざとおかしからんとして、輕々なる歌おほかりといひ、阿佛尼は金葉詞花などは、歌すがたもかはりて、一ふしおもしろきところある歌のみおほく、はいかいめきたることがちに候

やらんとおとしめ、石原正朋も、古今よりこなた、漸に今めかしく、花やかにはなりたれど、今の姿、大かたは同じかりしを、白河堀河など聞ゆる御代に、いとけさやかにけうがる「岩すべるみ山かたろはおりかたみ花まきあげよ谷の辻かぜ」などやうの、不思議なることどいで來り、さるは、古今以來の風にわきて、新しくめづらしくよまんとのわざにはわれど、いとけうとくすさましげなり。こは、俊頼基俊などにはじめて、數十輩の歌人、響の聲に應ずるが如く、皆その風にうつりしなり。撰集には、詞花金葉、大かたはなだらかにてめでたけれど、その心ばへはまじれりといひ、吉田令世は、按ずるに、拾遺集を應徳三年にえらび奉られてより、金葉を奏覽せられたる大治二年迄、凡四十二年になれり。これより先のうたは、みな前集どもにとりとられたりとも、四十年の中、などかよき歌もあまたいで來ざらんや。歌の數もあまりに少く、すこし計のうす草子なるは、敕撰の歌集といふべくもあらず。いとつたなきわざなりといふべし。とまで冷罵したり。

敕撰は、粹の粹なるもの、玄の玄なるものを集めて、上奏せしむるものなるにより、普通凡庸の歌人に命せず、見識一世に秀で、德望衆表に高きものを拔きて、その任を完うせしむるは、もとよりその所なり。この故に、宣命を蒙りたるものは、生涯の名譽として、心を撰集に潜め、粹の粹、玄の玄を采りて、上意に對へざるべからず。卿の院宣をうけたまはりたるは、實に天治元年にあり、

集成りて奏覧せられたるは、大治二年なり。その間、殆四ヶ年を經過し、集むる所、僅に六百五十餘首に過ぎず。これを古今にくらぶれバ、その數の三分の一にすら上らず。これを後撰拾遺等に較ぶるも、その二分の一に達せず。これを後拾遺に比するも、亦然り。これを後の撰集に見るも、詞花集を除きては、何れも千二百首の上に出づ。令世をして、うす草子の評あらしむるは、實にこれがためなり。然らバ則、敕撰として見るに足らざるか。數の多少を以て論ずるは、未その眞價を知らざるものなり。且それ、撰者にして、如何に抜群の技倆を具へ、如何に功妙の金葉を編まんとするも、他に拘掣抑沮あるものあらむ、自由に驥足を伸はすあたはず、本然の技倆を振ふあたはざるは、識者の夙に承認する所ならずや。卿のこの集に於ける、またこの憾なきあたはず。前に引ける今鏡の、貫之もめでたしといひながら、三代集にもれ來て、あまりにふりたり。覺雅法師も、げにとも、つゝきおぼえずなど仰せられけれど、古き上手ともいふまじかりけり。又、いとしもなくおぼしめす人、のぞくべかりけりとて、おぼえの人をのみとりいれて、つきのたび奉りければ、これもげにともおぼえずと仰せられけれど云々とあるを見ん、當時を推測して、その狀を察するに足るべし。

余は今、桐火桶を借りて、金葉より、又うたさまよろしくよみすゑて、つたなからず侍るにや。歳頼の朝臣なども、その頃の達者にて侍りし故にこ

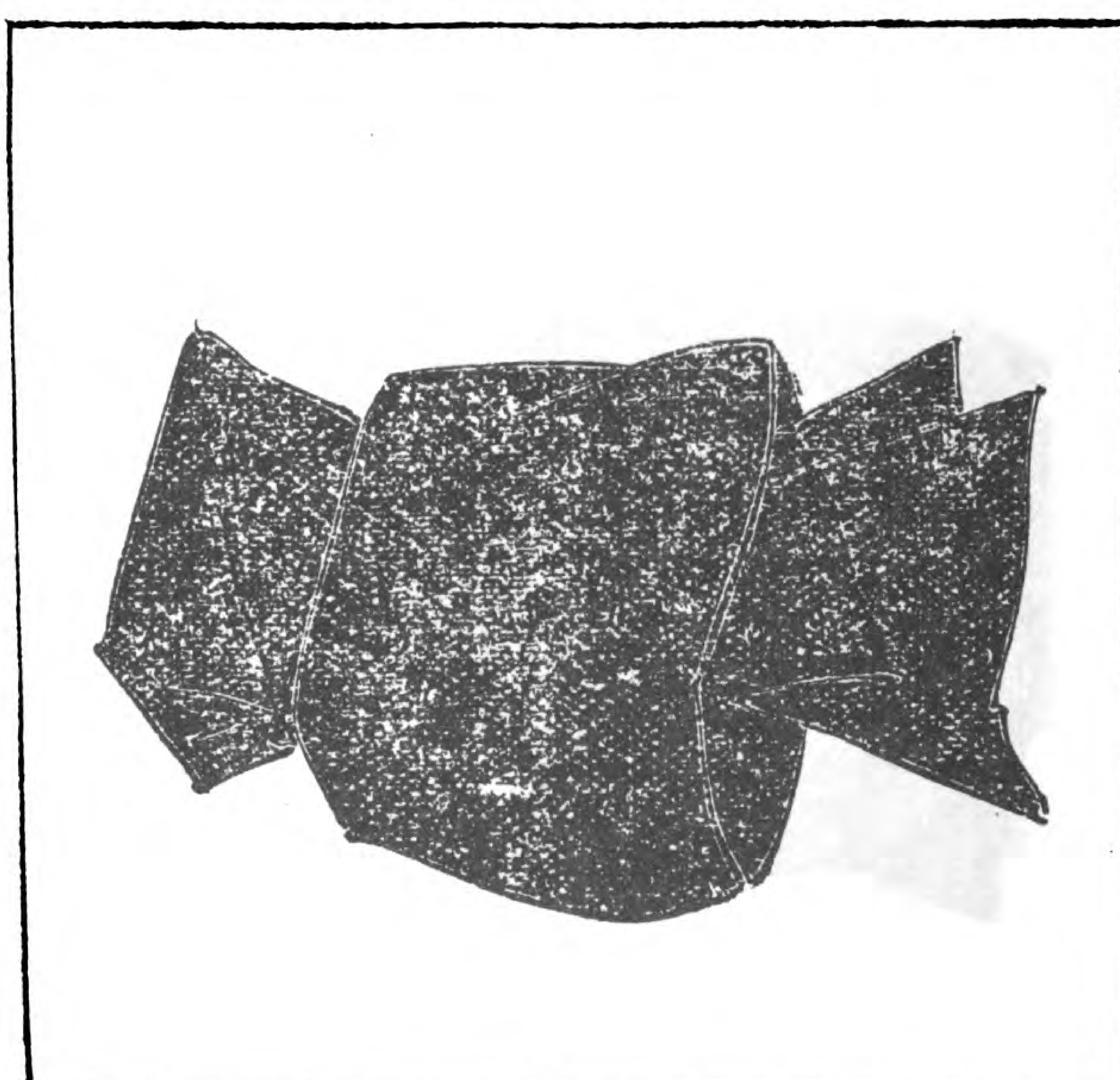
そ、侍りけめと評し、且、一言を加へて、歌かずの少きは、はえなき心地ぞせらるゝといはんとす。基俊朝臣は、この集に入りたる、永成法師が賀の歌「きみか代は末のまつ山はるぐ〜とこす白浪の數もしられず」を難じて、是は以ての外の事なり。然れども、沙汰なくて金葉集に入れたる撰者、大なる誤なり。よみ人はとてもかくても有るべし。集をえらぶほどの人、心得べき難を見とがめずして、入れ侍ること、申すべきやうもなき失なりといへり。君が代は末とつゞき、禁忌に觸るゝ故なり。契沖阿闍梨も、皇后宮肥後が、「いつとなく風ふくそらにたつ塵のかずもしられぬ君の御代かな」を難じて、世のさはぎを風塵にたとふるを、[illegible]ひまさでならでも、くらふ山の櫻のちる花びらなども、數おほきものはあらんぞ、これぞ、たとへのいまくしくと聞ゆるといへり。然るに、僧慈延も、この歌を金葉の失錯なるまじくやはとおぼゆるを、古よりその沙汰なきは、愚意のひがおもひにやと事新しげに定めたれど、契仲すでに難陳したるをや。契沖また、基長が竹風似雨「なよ竹のおとにも袖をかづきつゝぬれぬにこそは風としりぬれ」は、題と共にいづくを冬とて、此部に入れたるにか、おぼつかなしといひ、北村季吟も、題と共に雜なり。冬部に入る故あるにやと疑へり。契沖また、卿が後朝戀「わがこひはおほろの淸水いはでのみせきやるかたもなくてくらしつ」を、題の意にかなへりや、おぼつかなしといへるを、北村季吟は、昨夜の逢瀬のあはれを、心中におも

ひあまりて暮すとなり。と解き、別に非難を加へず。契沖また、長實が戀の心を「山の井のいはもる水の影見れどあさましげにもなりふけるかな」を、こひにやつれたることを、山の井は淺きことによみつけたるにて、よめりといへり。北村季吟は、資仲が霧藏紅葉「もみぢちる山は秋ぎりはれせねどたつ田の川のながれをぞ見る」を、題も歌も秋と聞ゆ。冬部に入ること如何と怪しみ、卿が紅葉の歌の「立田川玄がらみかけて神なびのみむろのやまのもみぢをぞ見る」を、落葉のさまなれど、冬部に入るにやと疑を殘せり。

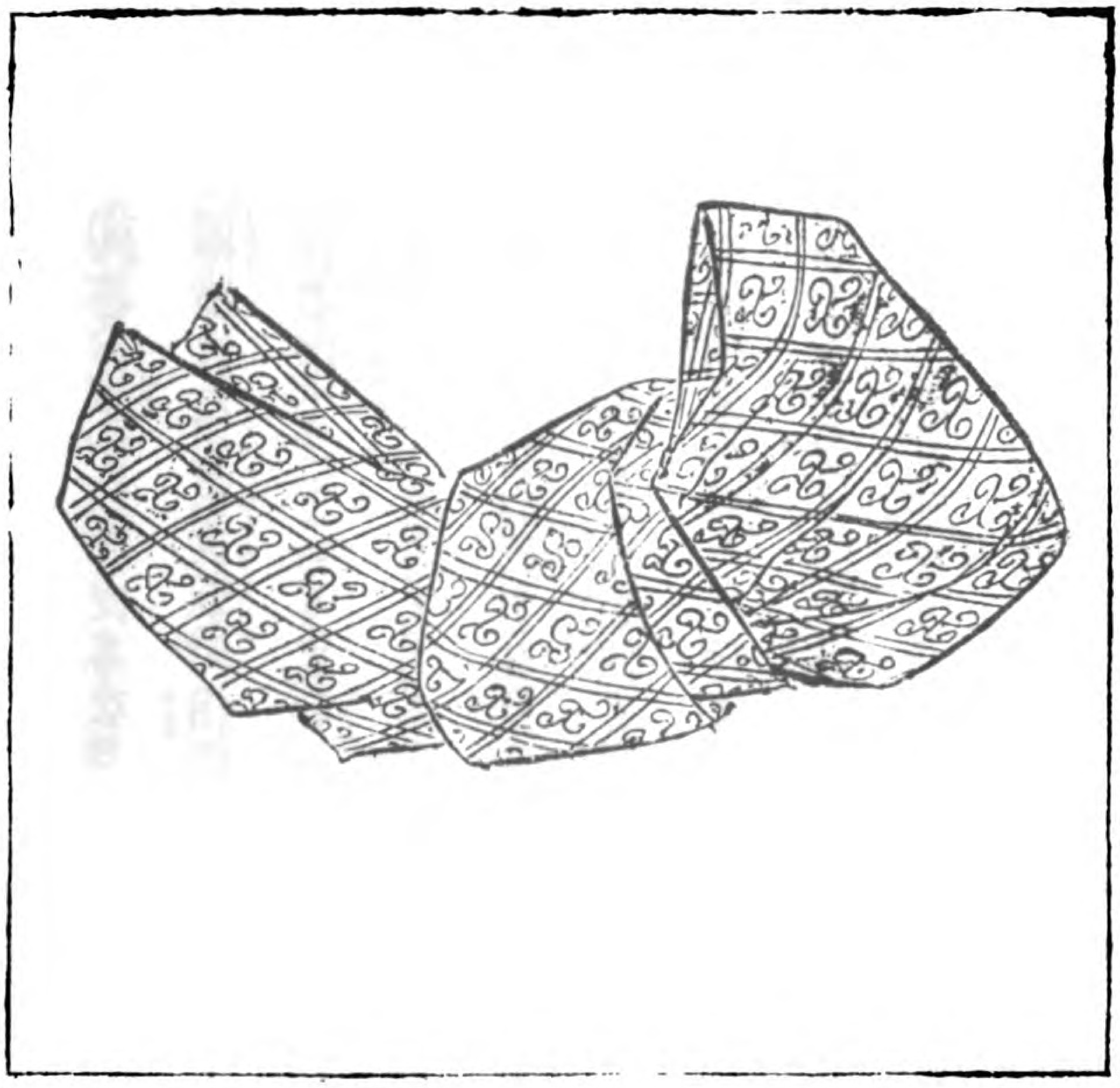
井蛙小錄　井上頼文

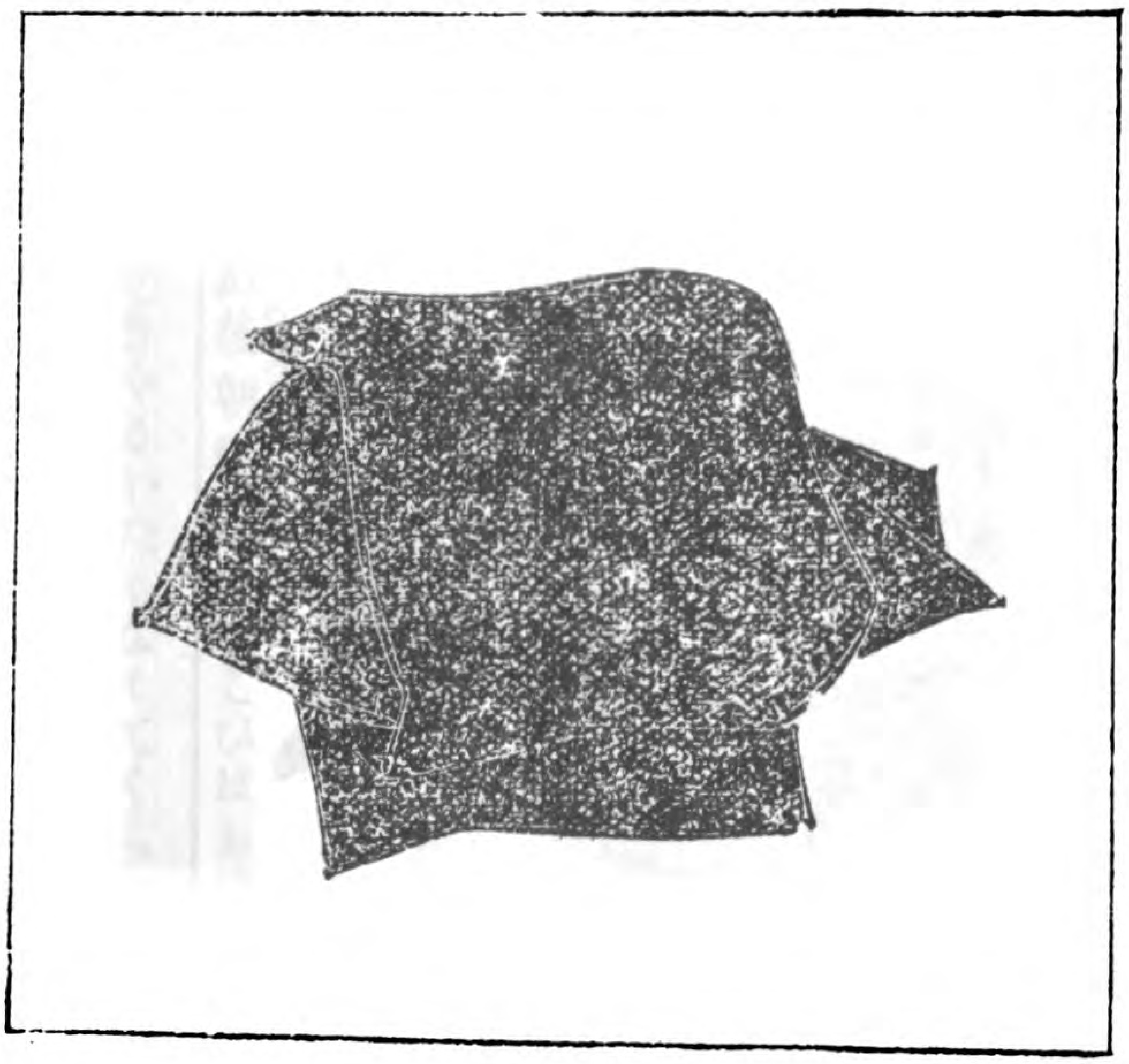
帯のむすびかた（承前）

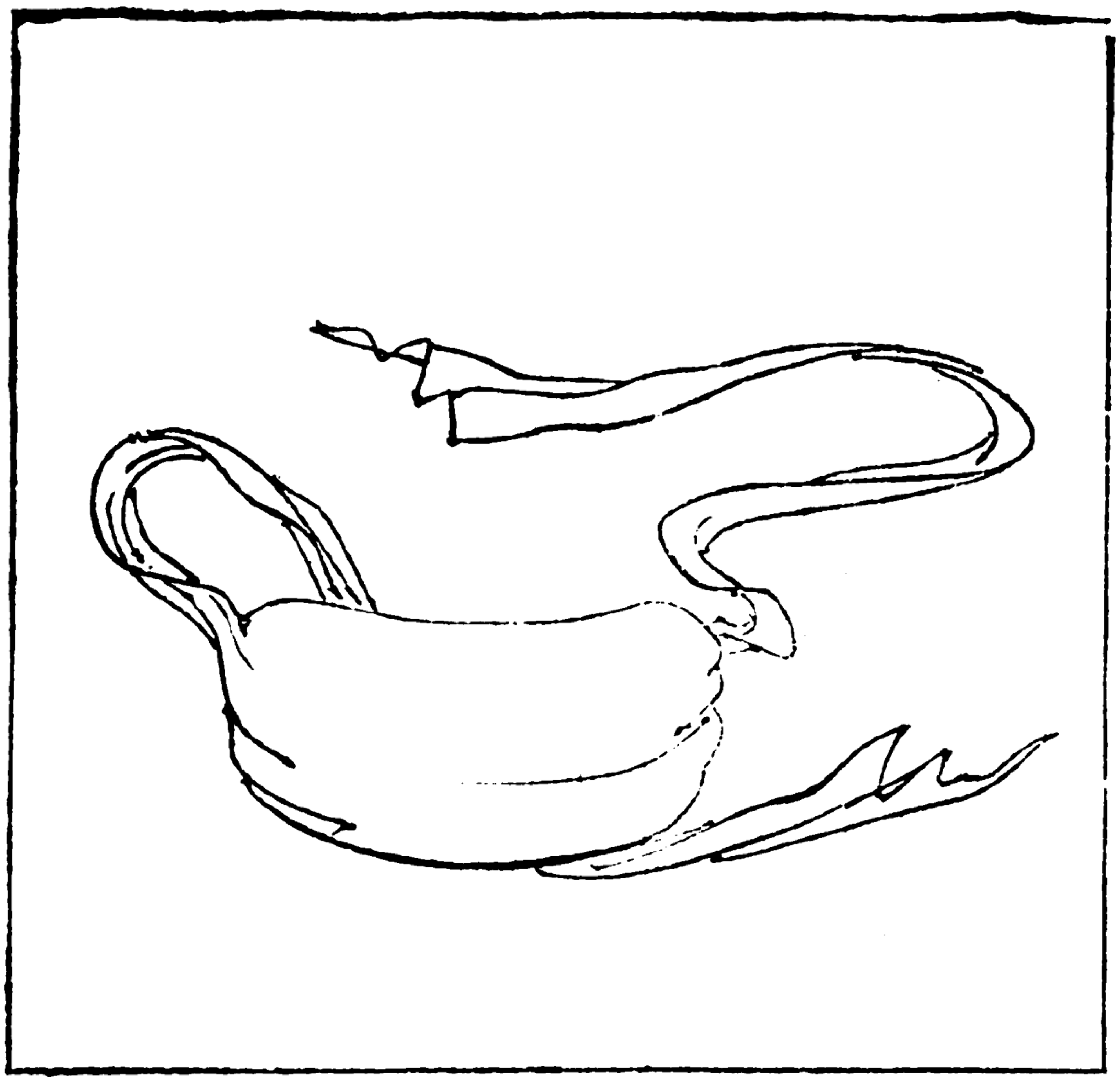
おいそ結び



おたかむすび







あらずものがな（第四）

鹽井雨江

（六）若き女子の、外出を好むは、何處の空に、心の迷ふらむ、何にとなう、覺束なく、やすからず、靜かならず、あらずもがななり。女子の心といふものは、靜に深からむが、こよなき上品なり。動きやすく、淺く、多かるは、極めて下品のものなり。外出のみ志ざすは、心の動きやすく、淺く、心の多かる証しにて、下品の限りなり。

上野の櫻、いまだ開かじときけば、開きてのみ見む、心なしと、花や恨みむ、いでや開かぬまより、花は見むといひて行き、飛鳥の櫻、半開ときけむ、盛りとなりては、散るを待つのみ、半開こそ、頼母しく、見所多かれといひて出で、隅田の櫻、散

りも初めず、咲きも殘らずときけど、けふあすや花の命ならむ。遲れては、くやしからむといひて、又あこがれ出で、はては、花の散るとき〳〵につけても、木の下風も寒からで、雪と降るも面白からむといひて、又あこがれゆき、葉櫻をば如何にといへば、ゆかりの色も唯ならず、むかし思はれて、捨て難きものといひて、あこがれ出で、梓の弓の春、三月といへど、射たらむ矢のひま。ましてや花、長閑なる風に、はゝ笑むといへど、三日を命といふ花、此の短き時にだに、かばかりに動き、かばかりに誘はれ、さばかりに移り、さばかりに變る、輕く淺く多かる心、かゝる心、吹かで飛ばむばかり豔れて、おぼつかなく、はかなくあらずもがななり。

さはいへ、花ならば彌生、尾の上も麓も、咲きと咲きて、見上るも花、見下すも花、遠も花の雲、近も花の波、曉も花より明け、夕べも花に暮れ、天つたふ日も、はなに晴れ、花に曇り、雲井の風も、花と吹き、花と靡き、花が世の中とばかり見ゆる頃、はじめて一日、父母ならむ人と伴れ立ちて、めづらしげに、若き女子の、野山をかけたらむは、さすがに、靜に深からむ心も、動きてかとおぼえて、なか〳〵に、常の奧ゆかしき心も、こぼれて匂ふになむ。

花は、咲くより散るまで、月はくらきよりあかき、紅葉は、薄きより濃き、雪は降るより、消ゆるまで、四季のあはれ、朝夕のけしきに、移るのみ動くのみならむには、輕く淺く多き心も、さすがに、

下品ながらに、なほ取るべき方もあらむ。されど、歌舞伎座、明治座、新富座、おなじ狂言の見物、必ず二度三度。春木座、新市村座、替る舞臺、新なる度、必ず一度。澤村座、淺草座、吾妻座へもあこがれてゆき、三崎座にも、見ざる狂言なく、藍染座にも、あはざる演劇なく、はては、淺草の奥山に、犬の踊りををかしときゝて、ふりはへて行き、兩國に、チヤリネの曲馬、奇妙なりときゝて、走りて行き、新聲館の人形芝居、音よのみはきかず。動物園の象の話し、はなしにのみにはきかず。慈善音樂會に、唱歌をふり立つるも、笑止なれど、甚しきは、あやしき教會にさへ入りて、刑餘の狐骨を拜み、讚美歌とやらむ、酸鼻すべき歌を、歌ふを樂みとして、日曜日を待ち兼ぬる令孃あり。遂には、隅田の川、大水なりときけバ、漲る濁水をさへ、面白からむと出でかけ、神田の町、燒けたりときけバ、燒け跡の煙りをさへ、珍らしげに、見物に出でたる、漲る水よりも、燃る火よりも、無慘、なさけなく、もの凄まじくおぼえて、下品の限りの心、かゝる心の、落ち着く天は、何處ならむ、此の世の中には、絶えて無からむと思へど、人の世のものならぬ心地して、ものゝけのごとく見ゆるは、かゝる女子の影。もののけあれど、あらずもがな、無くもがなといふなり。

馬の詞　　横井知萬多

痩せさらばひたるに、人あまたのせる車ひかせて、

したゝかに策あつれバ、わきのあたり、手綱にすれて、毛と見ゆるもの一すぢだになく、泡だちて、今にも血あゆむやうよそこなはれたるが、あはぎ／＼はせゆくになほあかずむちふりまはすめり。あはれ、御者などいふきはには、馬は活きたるものぞといふこともわかぬよやと、いたましく、又腹だゝし。昔は人のせて車ひくは、牛のわざなりけむ、しかも十人二十人とのせたる事やはありし。そをとくゆかむと思ふ心よりして遂に馬とかけかへ、猶のりしろさはに得むと思ふ心よりして遂に數多の人をのするやうにもなりたりけらし。又やせたるに、うは荷うちて、こゝしき坂のぼりゆかしむる、いづれかいたましからざる、世のひらけゆくまに／＼、おのれのおろかなるより、牛は車ひくわざはのかれつれど、皮と肉とこと處にさらさるゝうきめみるやうになりにけりと、いといたましく思ふにつけても、馬は車ひくわざこそまさりつれ、牛のやうにわさましきめみることもなけれど、いといみじくまされりと思ひしはどもなく、又馬の肉などしるせるが、處々に見ゆめり。いきては鬼のごとき男どもの思ふがまゝにおひつかはれ、死にては地獄とかいふらむ處の苦しみをうけ、骨も肉もちり／＼にせらるゝ、實に馬はどかなしくいたましきものはあらじ。今より吾は馬にのらじ、ましてそがひける車にはのらじ、荷も負はすべき事かはなど、思ひ折しも、蹄の音いと勇ましくきこゆ。ふとかへりみれど、武士が跨りたるまづをゝしく前にかけ、錦の御旗風になびく

は、大御幸にまし〳〵けりと拜みまつれば、光りかゞやく車に、かけたる二頭の馬の、いといさましく、いとうれしげにふみならしつゝゆくに、何事もみな打忘れ、馬にさへならまほしくて、心の中に思ひつゞけゝる。

みくるまにつかふる駒はうれしさを
ひづめのおとにたてゝゆくらむ

道のしをり歌合（十）

久志本常幸寄贈

なかなかに塩くみたゆむあま人の
袖やはすらんさみたれのころ

つま木こるしづの衣のあさしぐれ
ほすもや寒きふゆのやまかせ

山に海に、民のしわざのいとまなき、貧しく苦しめるあはれさおもひやるにも、涙こぼるゝなり。

いかばかり柴こる峯のさえつらん
夕しもおびてかへるやまびと

さらでだにかへさくるしき山人の
つま木のうへにつもる雪かは

山里の民は、わきて勞するぞ、一しほいたましき。

いたづらにやすき我身ぞ耻かしき
苦しきたみのこゝろおもへば

夜をさむみねやの衾のさゆるにも
わらやの風をおもひこそやれ

民をあはれふ情のふかきこと、かくまでに思ひ

およぼして、このありがたき仁政もおこなはるべけれ。そも〳〵、さぶらひの家にうまれ、かたじけなく恩祿をうけて、ゆたかに租税をはみながら、民の勞より出たることをもおもはず、君のめぐみに報ひたてまつるべきわざもなさで、いたづらに身を逸樂にくらして、世にはづる心もなきともがらの、何とて冥加に盡ざるにや、幸にして免るといふものなるべし。

世の中はとてもかくても有ぬべし
　みやもわらやも果しなければ

手まくらのすき間の風も寒かりき
　みは習はしのものにぞ有ける

たることをしれとのをしへなり。とかく世の中は、あるにまかするならひなれバ、何事も、身の分をまもりて、不自由をしのぶべし。ある人のいましめに、守るといふは、なしたき事をこらふるにあり、なしたき事をこらへざれバ、國天下をたもちてたらずとなん。げに人情のあさましき、おもふことをやう〳〵たりぬれバ、たるにまかせてあきたることをしらず、すでに隴を得て、また蜀をのぞむ、上がうへかぎりもあらじ、我よりも下のあまたなる人を見るべくと、仁齋先生伊藤維楨のいへりしは、いと〳〵たふとし。

上見ればのぞみ計りの世なれども
　われほどもなき人もこそあれ

よしや身のうきも歎かじ思ひ出の
　ある人だにもゆめの世なるに

止まることをしるのをしへいとたふとし。妄念のおこりなん時は、これを誦じて、心の火をけしとむべし。

世をすてゝ山にいる人やまにても
　なほうき時はいづちゆくらむ

住ばまた浮世なりけりよそながら
　おもひしまゝの山ざともかな

人の心の物にうつりやすき、近きをすてゝ遠きをしたひ、こゝをいとひて、かしこをうらやみかくせばよからんや、させむいかならんと、さま〲にくるひまはるは、みなをろかなるまどひなるべし。

みゆきふる遠の山べもみやこより
　見ればのどかにたつかすみ哉

山里は世のうきよりもすみわびぬ
　ことの外なるみねのあらしに

よそのこのもしげに見ゆるを、そらにしとふは、心さだまらぬ人のまどひにて、よそより思ふと、其所に居て見るとは、何事も大にかはるべし。「いづれともおなしうき世の中なれど所かへても住うかりけり。」

あふ坂のあらしの風はさむけれど
　行へしらねばわびつゝぞぬる

浮ふしはげにかりそめぞ津の國の
　なにはの事もよしや世のなか

事に堪しのぶのまもりかうぞ有べき。

白雲のたえずたなびくみねにだに
　すめは住ぬる世にこそありけれ

今さらに住うしとてもいかゞせん
　なだのしほやの夕ぐれのそら

うきすまゐも、なるゝになれて、しのばざらめや。「わびぬれば身をうき草の根をたえてさそふ水あらばいなんとぞ思ふ」は、はしたなし。

世の中をうしとぞいはゞかた時も
　ありへなんやは忍ぶればこそ

ことたらぬ世をな恨みそ鴨のあし
　短かくてこそうかぶ瀬もあれ

いひてもせんなき事を、とやかくとつぶやきつつ、世をかこち人をうらむ女のはしたなきこゝろいとうるさし。

つくゞゝと思へばやすき世の中を
　こゝろとなげく我身なりけり

うきことは世にふる程の習ひぞと
　思ひもしらでなになげくらん

よく世をあきらめたり、かしこき心にこそ。よのつねのおろかなるともがらは、心からこゝろにものをおもはせて、身をくるしむる我身なりけりとは、いとあぢきなし。

身のうきを人のつらきと思ふこそ
　我ともいはずわりなかりけれ

心だにわがおもふにもかなはぬに
　人をうらみんことわりぞなき

みづから身をせめて、人をとがめず、有がたき心ばへにこそ。げにもおのが身のうへにさへかくはすまじきとおもふ事をも、時により、あやまちてすることおほし。人のなすわざ、我心の

おもふこどくなるべきやうなし。世にかんしやくといふ病のあるは、我儘の長じたるものとなん。此ことわりにくらきゆゑなるべし。

大方のわが身ひとつのうきからに
　ひとをも世をもうらみける哉
数ならぬ我身のほどをしりぬれど
　ひとをもねこそ恨みざりけれ

わが心ひがみぬれば、うらむまじきものをもうらむひがことの甚しきなり。

いかばかり人のつらさを恨みまし
　うき身のほどかと思ひなさずは
世を恨み人をとがめんかたもなし
　みの愚さはこゝろつかずに

よく身をおとしめて、心おのづから安らかなり。わぢきなく心をうらみかこつは、おほくは、わか身のほどをしらざるより、いたづらに、心をなやますなるべし。

（つゞく）

まろくさも　あまりまろきは
ひさかどあれや　ころひ
ひさこゝろ　やすきに

忠孝二筋道

渡部乙羽

其三

我他人に辛らからば、他人も亦我に辛らきの道理にて、浮田秀家の御臺所は、平生日頃慈悲深き姫なりければ、今零落の淵に陷り給ひしとは云ふものゝ、積善の餘慶は、こぼれたる種子にも、何日か花を着けて、思はぬ方に實を結びしに齊しき節江が忠節。其頭鬼の栖む嶋根と思ひ込みたる八丈へ、流され給ふ若君の傅役を自ら願ひ出でしに、公儀にても忠勤の抽んでたるを嘉みし給ひて、其儀女性ならば苦しかるまじとの下知に、いよ〳〵隨ひ行くことを許され、勇みに勇みて攝州住吉の浦より舟出したり。

今日や出でむ、明日や流されむとて、日和をのみ選み居りたるに、其日は空よく晴れ亘りて、朗々と霞むが如き山々、磯馴松の根を洗ふ白き漣漪をくゝり、群千鳥の立つ彼方は、水光鏡の如く光りて、海は宛然熨すかと思ふばかりに平かなり。はや時刻は迫りぬ。軈て帆を揚ぐれば、折よくも東風を孕みて、船は欸乃と艪拍子





とにつれて、波のまに〳〵岸を離れぬ。船には切無き胸を押包みて、涙をかくす氣丈の弱女、陸には悲しき思ひするも、身分に恥ぢ人目を忍びて、泣かぬ心の何は苦しきを耐ゆる御臺所、露滋き松の木蔭に潜みて、永き離別を惜めど、靜江も若君を舷頭に立たせ參らせ、せめては優しき顔など見給へ、盡きぬ名殘も友綱斷るまでの中ぞと、聲立てゝ呼べど、其方も隨分健固で居よ、世に神佛のましまさむ限りは、また何日か赦免の沙汰無しとも云へず、雨を厭ひ風に冒されな、彼の嶋は暑き處と聞く、霍亂などにかゝるなよと、後には人目も草も構はで、絶え入るまでに呼び給ふ、船は一搖り搖る毎に次第に岸に遠ざかりて、遂に形は見えずなりぬ。御臺所は岸破と伏して、泣き給ふも道理なり。

女中が抱ける幼兒の斯かる悲嘆を知らずして、その懐中に快く熟睡しが、何物にか驚かされけむ、怖ぢ〳〵と泣く聲悲しく、賺せども泣き歇まず、愛せども笑まず、呱々乳を探りては、一入高く泣き立つれば、正体無氣なりし御臺所は、傍近く摺り寄りて、その背を靜かに撫で給ひては、耳馴れぬ子傳唄を唄ひつゝも、泣く兒を賺し給ひけり。思へそこの兒の不憫さよ、母は妾ゆゑに遠き島根に押渡りて、他人の子に乳を運び、

他人の子の背丈伸るを樂しめも、現在血を別けたる我が兒は、寒夜の孤兒の飢に泣きて、瘦犬の乳房を舐る狆に齊しき今の境界、たゞ一片の義理に挾まれ、女ながらも武士道の意氣地を磨く覺悟の一徹より、子を捨てゝ千里絕海の小島に移り、漏る乳を鮑の貝に絞りて、朧月夜に濱邊にすてゝは、片思ひの遣瀨無きを恨むべし、妾も浮田中納言の室と呼ばれ、百萬石の家の姬君と仰がれながら、親子の緣の薄氷、夫に別れ子に離れ、何の興ある事のあるべき、うたてきは浮世なり、味氣無きは人の身なり、妾は思ふ、よし貧賤に暮せばとて、册く夫には親しみ睦み、子は膝元に這ひ寄るを愛して、坊よ孃よと育てなば、夕顏棚の下涼みも、結句樂しき事もあらむ、大名の子に生れしは我子の不運か、武家に出でしはこの子の不仕合、綾金襴に包まりても、憂ひある身は囚人に齊しく、花よ月よと浮かれても、儘ならぬ世は如何せむ、あア面白からぬ世の態やと、泣き伏し給ふを慰め參らせ、こゝは人目も繁かれば、一先づ家に歸らせ給へ、泣き給ふても最早詮なし、泣いて御眼を腫らし給ふな、苦勞に病氣を求め給ふな、御臺樣、いざ御歸途と左右より、姬の兩手をとり參らせ凋れかゝりし海棠を、朝の露の力草、漸う步ませ給ひけり。

この日を悲嘆の初めとして、別れてよりは兎につけ角につけ、靜江が事のみ思ひ煩ひ居給ふにぞ、袖に涙の乾く間も無く、眉は愁ひに伸びずして、雨に惱める優姿窶れたれども大家の姫は何處と無く、氣高き態は隱せど隱れ無かりけり。

花紅葉幾春秋か色をかへ、靜江が一子權之丞は今年六歲の春となりぬ。袴着髮置の祝ひも去年濟みて、愛は年一年と增しけれど、御臺所は喜び勇みて、それ破魔弓よ、犬張子よと、好むか儘に買ふてやり、我子にも無く愛し給へば、眤れ馴染むこと甚だしく、生みの母にも劣らざれど、お附の女中も重く勞りて、只管若君の如く待遇けり。あれ〳〵權之丞樣がお目覺めになりました、ドリヤ日當りの好い處で、鬼事などいたしませう、おうそれよ、今日はこのお子さんの母御が流され給ひし三年目、如何な暮らしなさるゝ事やら、風の便もありませぬな、生死の程も判りませぬ、それにつけても御臺樣には、義理あるこの子を大切にせよ、成人の後には屹度父の家名の澤橋を立たしてやる、蟄居の妾には要無けれど、本家に賴みて一廉の武士に取立てんと仰せあれど、何を云ふにも八丈島、鳥も通はぬと唄の文句にも見えましたぞ、兎角女中の姦ましかりけり。

文林

首夏月　近衛忠熙

わか葉さすかつらの枝をもる月の
影ことさらにすゞしかりけり

のどかなる日濱邊にいづ　毛利元徳

のどけさにをり立ちに景色よりは
濱なやつまんかひやひろはん

鍋島直大

寄波のしぶきにふれてそこはかと
みる心ちよきはるのはまつら

前田利嗣

貝拾ふあまのをとめにうちまぢり
あそふのどけき春のうなつら

長岡護美

芝はまにうち出でみれバあはの山
あはともみえぬ春がすみかな

高崎正風

面白きこゝろのはてもみえぬかな
かすみをあさる濱のとはあさ

前田利鬯

あまの子に交りてわれも打かすむ
春のいそべにかひやひろはん

風靜花盛　諏訪忠元

青柳のいともしづけきはるかせに
春のさかりをあくまでもみん

のどかなる日濱邊にいづ　　宮地　嚴夫

果もなく樂しきものはうら〳〵と
　かすむ濱べのあそびなりけり

坂　正臣

いそざきの松の春かせふきたえて
　貝ひらふ子がそでもかへらず

小出　粲

今一つよきかひえんとひろふまに
　はるかになりぬ歸るはまぢは

植松　有經

うら〳〵と霞わたりてこぎいでし
　舟もうこかぬなみのうへかな

大口　鯛二

舟ならで歸られぬまで汐はみちぬ
　沖のはなれすかひひらふまに

菜花の盛に友どちの來りければ

片岡　正占

菜の花にこゝろをとめて思ふどち
　こてふと聞ぞうれしかりける

藤　　西川須賀雄

身にまとふ物ならなくに藤かづら
　花ゆゑひとをひきとゞめつゝ

糸山　貞幹

藤波はなみ〳〵ならぬいろなれど
　立かへりても見るべかりけり

春祝　　師岡　正胤

ちる花を惜むこゝろのみさわがしく
　四方よきこゆる御代の春かな

白牡丹　三輪　義方

いろ〳〵の花の匂ひにわらそはで
しろきもゆかし露ふかみぐさ

大野ささ子　佐々　豊水

父母のこゝろをくみてつくしけん
まことの道をなかくつたはる

千倉百首の中　森　馬太

見わたせバ昨日におなじ安房の海
いつれのなみと年のたつらん

百千鳥さへづるなかにふゆかれの
こすゑにたかきひよどりの聲

竹　野崎　宗英

すなほなる心にもまたひとふしを
こめて生ひたつ竹のゆかしさ

名所花　岸野　隆道

しをりして分入りながらまどひけり
よしのゝ山のはなのしたみち

春雨　千日　亮

山のはゝかすみにきえて青やぎの
いとも しづかに春さめぞふる

のどかなる日濱邊にいづ　近衛　貞子

海人の子に我も交りてうちかすむ
濱邊にけふはかひやひろはん

鍋島　榮子

大いそのまつ吹く風ものどかにて
濱べにたえぬみやこびとかな

前田　朗子

波の音もきこえぬはるのはまづたひ

すゞろありきのおもしろき哉　柳原　愛子

いづく迄汐はひぬらんみるめかる
はてこそみえね濱のまさご路　小池　道子

櫻がひひろふはまべのまさごみち
春は野やまにかぎらざりけり　北島以登子

海原はかすみわたりてさくらさく
島根をめぐるふねもみえけり　中島　歌子

雲雀

濱づたひすぎ田の梅もけふはみん
朝よりかせのなき日なりけり　諏訪　晴子

菫つみつはなぬきつゝ行く野邊の
かすみがくれにひはり鳴なり　安東　菊子

田家春

春風のまきしかと田のさくらはな
をしくも田子はかへしける哉　小川　昌子

竹の子を見て思をのぶ

かぞへ來しその年月のうきふしを
思へはかなしそのゝたけの子　師岡須賀子

海邊花

少女子がひらふさくらの花がひに
まことの花もちりまじりつゝ　海上　壽子

首夏鶯

夏かけてなくうぐひすは散はてし
花をやをしむはるやこひしき

落花感

長閑なる空のけしきに
待ちわびし櫻の花の
春風にほころひぬれバ
咲き匂ふ程こそなけれ
時なくも吹きくる風に
いち早く散り亂るゝか
こゝもへは悲もあるか
この花の匂へるかぎと
其雨のふりくることに
自からおのがさま〳〵
かくバかり移ふ花も
ことにまたしづ心なく

反歌

勝家貞良

常よりもなどか遅きと
春雨にうるほひそめて
目もあやに今を盛と
隙なくもふりくる雨に
はかなくも移ひゆくか
そこもへは惜もあるか
あはれ〳〵人の心も
この花の亂るゝかこと
其風の吹きくることに
移りゆくものと思へど
かく計り散りゆく花も
惜まるゝかな

雨風にうつろふはなのいろよりも
人のこゝろぞはかなかりけれ

そゞろありきして

竹園女史

此のころのくせとて、雨ふり出でぬれど、をやみなくて、きのふも、けふも、いたずらに、たれこめてなむ有りける。さるを、けさしも、空、いと、よく晴れわたりて、心さへ、すが〳〵しうなりぬ。いでや、近きあたり、そゞろありきせむやと思ひ立ちて、かなた、こなた、あゆみ行くに、道ふみまどひて、野中にいでぬ。すみれ、たんぽゝなど、所々に咲きたる中に、蓮華艸とかいへるが、花むしろ敷きつらねたるごとく見えて、いとうるはし。

手にとればやがてしをるゝ花ながら家なる子らがつとにしてまし」かたはらなる麥の畠を見れば、草取老父の、たゝずみ居けれど、こゝは、何といふ里にやとゝへど、山吹の里とこたへぬ。さては、かの賤の女の住みけむわたりにやと思ひて、猶行くほどに、たが家にかあるらむ、まがきのもとに、今をさかりと、山吹の咲きみだれたるをみて、

來て見ればいとゞ昔ぞしのばるゝ花のさかりの山吹の里」かく、口すさびて、里のわらべに、家路とひつゝ、日のくるゝほどにかへりぬ。

雜報

●皇后陛下御心を海軍に寄せさせ給ふ　先つ頃、皇后陛下には、横須賀なる吉野、松島、千代田の三艦を御覽あらせられ、そが技術の進歩に、いたく、御滿足あらせられ、猶、黑岡筑波艦長、東郷速波艦長に、拜謁を賜はりたる後、艦團の軍人一同に、酒肴の料をさへ賜はせたまひしかば、軍人は、みな、感泣に堪へざりきとなん。今更ならぬ大御惠の程、稱へ奉るも、いと、畏きことにこそ。

●琉球婦女の心ども　は、最と優しく、殘酷き事は、見るさへいとふ由なるが、此の程の事と

か。內地の芝居にものする、彼の怪談皿屋敷を、彼の地にて演じたりしに、井戸の水責の場に至りしかバ、見物するものゝ中、婦人は、二人三人と逃去りて、一人も殘るものなかりしといふ。哀を感ずるの情の深き爲か。はた、慘狀を畏るゝによれるか。

●孝貞の婦人　岐阜縣武儀郡神淵村福井繁太郎の妻ひでは、初嫁せしより、能く婦道を修めしが、先年両親を失ひしより、非運にて、間もなく二子をも喪ひ、其の夫も、重き病に罹りて、聾となり、四肢の自由も失ひたれバ、自、家業をも執ること能はずして、日に月に、困難に陷り、遂に、藥餌の料にさへ困じて、田畑をも賣り、家をも典りて、辛くも其の日を過しけり。ひでは、此の艱難の中にて、夫の介抱は言も更なり、賣り殘せる田地の耕作など、一身に引き受け、夜は薦など織りて、其の家計の補となせるなど、人の得堪へ難きことをも忍びて居たりしに、昨年夏頃より、其の祖母、亦、病に罹り、老衰日に加はりけれど、ひでの憂は、前に倍して、日夜衣帶をも解かで、二人の看護に、專、心を盡くしけり。かくて、日を經にければ、祖母の病は、漸、輕み行きしかど、夫は、終に、不治の難症となりたれバ、治すべき望なきも、ひでは、看護毫も倦むことなく、孝貞を盡くすこと、多年一日の如くなりと、誠に目出度婦行なりけり。

●又　群馬縣上野國那波郡宮鄕村大字宮子村の井田武平治の長女すみといへるは、生つき、最溫和

にして、兩親に事へて至孝なり。その兄勝藏は、家を繼ぎけるが、酒を好みて、品行良しからず、家財をも傾けんとせり。十餘年前に、父母共に近傍に隱居せしかバ、勝藏の行は、益、甚しくなりて、家業をも勉めず、父母妻子の養を欠くことも屢なりき。されど、武平治夫婦は、未、壯健なりし故、勝藏を賴とせずして自活し、すみは、南勢多郡苗ヶ島村なる前原與次郎に嫁ぎけり。かくて、武平治夫婦も年老い、且、武平治は眼病にさへ惱みしに、勝藏は少も意を用ゐざりしかど、すみは、悲さ遣方なく、既に他家にありて子さへある身の自由ならぬにも、只管、父母を思ふの念止みがたく、終に其の意を夫與次郎に語り、家に歸りて、父母を養はん事を乞ひけるに、與次郎も、固より、其の兩親を引取りて、之を養ふべき資産あるにあらざれど、其の望に任しに、すみは、一子を連れて家に歸り、近傍の田地を借て自耕し、夜は繩を綯ひ、莚など織りて、其の得る處の金錢を以て、醫藥の料に當て、奉養しけり、されど、不幸にも武平治は、遂に盲目となりけるが、すみは、益、心を勵し、其の好む處のものは、其の意を滿たさしめ、數年の久しき、怠ることなく、能く其の道を盡くしけれバ、父母も深く其の志を愛せり。然るに、勝藏は、放蕩の末、終に病を得て、妻子四人を殘して、死亡せしかど、其の哀れさは、見るに忍びぬ有樣なりき。すみは、亦、之をも助けて、力を盡くしけるにぞ、人々是を聞き、其の志の篤きに感じ、或は、婚姻を勸むるあれども、兩親の存生中

は、必、他に嫁せずと云ひて、之に應せず、唯父母の奉養に、暫しも怠らずとなん。

●孝女みつ　は、香川縣少豆郡二生村の田口七藏の女なり。本年八歳にて、二生尋常小學校第一學年生なり。家素豐ならねば、父は、常に人に雇はれ、或は小商などして、其の日を送りけり。さる中にも、其の子の教育の大切なるを思ひ、去る廿四年四月より、みつを學校に通はしゝが、みつは、毎朝父母に先ちて起き、茶など沸かし、或は、其の妹を背負ひなどして、父母の勞を助け、又、學校より歸りて後は、山にて薪を採りなどしけり。然るに、今年二月の頃、最愛の母は、重き病にて歸らぬ人となりしかば、みつ等父子の悲しみは、言はん方なし。其の後みつは、朝夕の食事より、家の内の事をも、力の及ぶかぎりつとめ、父の助を爲し、妹をいたはりけり。さて、學校に上るに、其の妹を背負ひて教室に入ることを、父より學校に乞はしめけるに、教師も其の志の誠なるに感じて、之を許しければ、日毎の通學怠なく、其の成績も、人にすぐれけりとぞ。實に感ずべき行にこそ。

●美はしき姉妹　長野縣尋常師範學校附屬小學校に姉妹の生徒あり。姉なるを小島しげの、妹をみさをと云ふ。日頃睦しくして、絶ていさかひなどせし事なく、雨の降る日も、嵐の吹きすさむ日も、怠る事なく、共に能く勉め勵みけり。さるものから、學業も日に進み、他の生徒に比べては、其成績も著く、常に上席を占めたりけり。本年

三月には、學年試業ありて、姉の繁のは本年拾二歳にて、高等科二年生に、みさをは拾歳にて、尋常科四年に進級しぬ。今日も此姉妹は、互に袂を連ねて、いと睦しく語らひつゝ、學校に急ぎければ、繁のは、如何なる機會にか、向ふより來りし荷車を避けんとして、あえなくも、己が手にせし辨當を、小河の中に落しけり。繁のは、暫しが程、茫然たりしに、妹のみさをは、少し後れて來り、此さまを見て、いと氣の毒げに、繁のに向ひ、姉上、ひるにもならむ、わが辨當をめしたまひね。われは、たゞ、一はしり歸りてたうぶべけむ。いな〳〵、われこそ、用心の足らざりしために失ひたるなれむ、歸りてたうぶるは、わたりまへのことなり。さな心つかひしたまひそ。と、妹はすゝめ、姉は拒み、またしては、前の言葉をくり返しぬ。くり返されて、姉は尚は、うけひき兼ねて見えたりき。されども、既に始業の時刻も近けば、急ぎ學校に昇りぬ。第一時も過ぎ、二時三時も過ぎ、正午の時刻とはなりぬ。數多の生徒は、其の近きは家に歸り、遠くして辨當を持參したるは、各、食堂に入りぬ。さるに、一人しめりて庭に殘り、家に向ふにもなく、食堂に入るにもあらず、只茫然躊躇の様子なる一女生あり。是なん小島しげのにて、今や正午なれむ、己は此の日晝飯を凌がんと思ひ居りしに、妹のみさをは、其辨當を讓りて、姉の食机に殘しおき、己れは早くも家に歸りたるなり。繁のは之を見て、己れ之を食ふに忍びず、今しも獨り躊躇してありしなり。

教師は怪みて、此に來り問ひしかバ、繁のは、實を以て語りき、教師は深く感服して、丁寧に慰め、食堂に伴ひたりと。おな美しき姉妹なりけり。

●年廼舍とは、諏訪忠元氏の家の名なり。四月二十四日、年廼舍別會を催されたるおもむきにて、その折の歌ども、こたび送り越されたれバ、當坐通題の歌のみを、左にかゝげてん。

四月廿四日　年廼舍別會

當座通題

池邊藤

池水をゆかりの色にみするかな　水野　忠敬
このみ園生の藤なみの花

春ふかく花ちりはてし庭ながら　増山　正治
いけのほとりにふぢの花さく

藤浪の色のふかさに池水の　増山深雪子
そこもゆかりの色ぞ見えける

底きよき池のほとりの藤こそは　大河内かづ子
匂へる色もいとゞふかけれ

岸の邊にすみれ花咲ゆかりにや　鈴木　重嶺
さかりをきそふいけの藤浪

石橋もみゆるみいけの岸のふぢ　鈴木　弘恭
春と夏とをかけて咲けり

さく藤は今をさかりとなりに鳧　櫻井　尚保
池のにごりをうち澄しつゝ

池水の底のかげさへにほひけり　諏訪　忠誠
みぎはの松をこゆる藤なみ

池ぎしに藤さきしより春風に　千野　眞艸
薄むらさきのなみぞよせける

暮てゆく春のゆかりを影とめて　島崎　秦憮
むらさき深き池のふぢなみ

池水のみどりの色をむらさきに　荻野みさ子
なかぞみせたるふぢ浪の花

咲藤の花のゆかりか池みづに　後藤かね子
うつろふかげの匂ひのとけし

年毎に色香もまさる藤のはな　飯田いね子
ゆかりも深き底の池みづ

池水にかげをうつして藤なみの　諏訪　晴子
色もゆかしくさきみたれけり

よる浪の色をもそめて藤のはな　諏訪　忠元
池のみぎはにさきにほふなり

特に諸孃に告げまゐらす

世の諸孃が、月に二度づゝ、兼題歌文を寄せらるゝは、眞に喜ばしきことゝて、大に謝する所になん。さて、之を謝すると仝時に、告げまゐらすることあり。そは、一、期限、二、文字なり。すべて、兼題歌文は、發行日(五日廿日)の一週日前に、わが編輯部に届かんやう贈らるべし。文字は、成るべく、鮮明に書き玄るされよ。歌文の、後れて届きたる、文字の鮮明ならざる、ともに、大に困ずる所なり。これらは、たとひ、秀れたる歌文なりとも、やむことをえず捨つることありて、いかにも本意なき限なり。あはれ、諸孃、よく心し給ひてよ。

そへて告す、歌文兼題は、はやく定めて、女鑑第五十二號の附錄させり。入用の諸孃は、郵便切手五厘そへて申し越し給はゞ、直に送りまゐらすべし。

教の庭

五月五日兼題　首夏月

（天地人のほかは原稿到着順なり）

天　山口縣佐波郡宮市　新藤ひさ子

花ころもかふるときとててる月も
かすみの衣をぬぎや捨てけん

地　京都府船井郡下粟野村　竹内美枝子

つゆむすぶにはの若葉にてる月は
涼しきもの丶はじめなりけり

人　千葉縣佐倉宮小路　植木鋼子

あさかりし春はきのふにくれ竹の
葉越すゞしきつきのかげかな

石井徳子

ながめやる春は軒端にくれたけの
影めづらしきなつの夜のつき

永井さい子

きのふまで花にくもりし山のはの
若葉すゞしきゆふづきのかげ

内田慶子

ぬぎかへしころもの袖は薄くとも
またしはやどせなつのよの月

内田雪子

なはかすむ遠山のはのつき見れど
昨日のはるのこ丶ちこそすれ

小川貞子

時鳥なきてすぎんとすむつきを
友と見つ丶もけふよりぞまつ

高木こう子

葉櫻のひまよりもる丶つき見れど
きのふの春のまのどる丶かな

棚橋すま子

水枝さす若葉のうへにはひ出て
みどりまた丶る月のかげかな

佐々有鄕子

花ちりし春葉のかげにたちよれば
すゞしきなつをみする月かげ

小橋幸子

きのふまで花にあそびし春くれて
月かげきよきなつは來にけり

春くれて花のあとなきやまのはを　徳永萬壽子
いづるもきよき夏のよのつき

昨日みしはなの木末もいろかへて　澤田　春子
わか葉もれくるなつのつき影

春ふかきかすみときえててる月の　千々波橋子
ひかりさやかに來りけるかな

別れにし春のなごりはをしけれど　河野　文子
かすまぬ月もなつかしきかな

山の端のはなの白くもあともなく　日下さだ子
すゞしくのぼる夏の夜のつき

おひそはる軒ばの竹のひまもれて　大橋ひろ子
影もすゞしきなつのよのつき

呉竹の葉ずゑのつゆにうつりぬる　大橋　兼子
つきかげきよく夏はきにけり

昨日みし高ねのはなのくもきえて　平塚千代子
なつあらはるゝ月のかげかな

花ちりしみどりの木末てるつきも　小橋　幹子
すゞしく見ゆる夏は來にけり

夏さればふきくる風もすゞしくて　笠原よし子
かげもすゞしき夏のよのつき

つきかげきよき池のおもかな

春すぎてまだ程もなき今日なれど　淵井　富子
月のひかりはなつめきにけり

花散りて春はかぎりとなりぬるに　大槻かをる
つきの光りはなほかすみけり

池の上にうつりし月のかげ見れど　小原　里子
ひかり涼しきなつはきにけり

吹く風も好ましきまでなりたれど　熊谷あや子
つきの光りはなすみだにせず

春くれて夏としいへどてるつきの　土生　清子
かげも涼しきゆふぐれのそら

夏きぬと春葉かくれの木の間より　上野　兼子
すゞしさ見する三日月のかげ

夕かすみはれゆく峯の木の間より　高井　米子
さやかにてらす夏のつきかな

いつしかに花の木末はみどりして　馬島久仁子
月もすゞしきなつはきにけり

立こめしかすみの春はくれはてゝ　佐藤　蝶子
かげもすゞしき夏のよのつき

櫻ばなちりしわか葉の木の間より　佐藤　敬子
かげおもしろく照すつきかな

たちかくす霞も晴れてこよひより　羽田三緒子
三日月かげになつはきにけり

夏きぬと見ゆるみそらの月かげに　羽田たか子
またるゝものは山ほとゝぎす

花さきし春はきのふとすぎゆきて　藥師寺芳子
わか葉をもるゝ月のすゞしさ

おのづから涼しき影に見ゆるなり　野尻　鶴子
月もこよひやころもかへせし

春すぎて若葉すゞしきつきかげに　碓井　信子
はなのたもとも忘られにけり

若葉もる木の下やみをてるつきに　碓井　武子
なつのこゝろもしられぬる哉

昨日まで花ににほひしつきかげも　碓井和可子
けふは若葉のいろてらすなり

はるすぎし隅田川原のゆふそらに　平野　君子
涼しく見ゆるつきのかげかな

奥たけの葉末をもれてゝるつきは　山崎　政子
すゞしき夏のはじめなりけり

花のあとの若葉をもれて夕づきの　宇多田楊子
やゝすみわたる影はすゞしき

夏やまや昨日のはなのくもきえて　土山八重子
わか葉にもるゝ月のかげかな

月かげもしげる青葉にうつろひて　坂口みすゞ
すゞしく見ゆる夏は來にけり

惜みてし春もいつしかくれたけの　小林　貞子
葉末をてらすつきぞすゞしき

春くれてまたなれそめぬ夏の夜の　山田しづ子
つきは青葉にかげやどしつゝ

よべまでは花に宿りしつきかげも　安藤　米子
今日は若葉のつゆにぬれつゝ

月かげは木末のつゆにうつれども　横瀬たか子
おぼろや春の名ごりなるらむ

春がすみかゝりし月もひと夜へて　吉田　芳子
すゞしき程になつはたちけり

おきそめし若葉の露にてりそひて　伊藤　操
影もすゞしきなつの夜のつき

昨日けふ夏來にけりとみそらなる　つきも涼しくすみわたるなり　宇野さく子

露むすぶ青葉にやどるつきかげも　すゞしくすみて夏めきにけり　橘　雪江

花のくも消えて跡なきなつやまに　まだしはかすむ月のかげかな　坂口まん子

みし春の名殘もとめずもちづきの　影いちしろくなつはきにけり　横山りう子

みし花は木末にはやくちりはてゝ　若葉すゞしくてらすつきかげ　横山須賀子

春くれて夏きにけれどやまのはに　すゞしく月もいてそめにけり　片岡　光子

賤か家のみどりにまじるうの花に　てりそふ月のかけそすゞしき　淺井みさ子

佐保姫のかすみの袖にかくれつゝ　つきも今宵ははれわたりけり　田子　靜枝

しげりあふにはの若木の陰もれて　影もすゞしきなつのよのつき　淸水たま子

みつ枝さししげる若葉の隙もれて　涼しく見ゆるつきのかげかな　渡邊ます子

おぼろ夜の花になれきし月かげを　若葉に見るはをかしかりけり　大屋　丙子

はなちりて梢みどりになりしより　月のかげさへなつめきにけり　大橋てい子

春くれて夏のはじめとなりぬれど　つきの影さへすゞしかりけり　江馬　信子

かすみつる生駒の山もくもはれて　月にもなつのいろはみえけり　土屋てい子

春すぎて夏のはじめとなりぬれど　わか葉をてらす月そすゞしき　望月　靜子

行くれの早くもなつにうつりきて　はなのかたみの月そゆかしき　岡　佐波子

花のかのおとなく消えしわが庭の　青葉もれくるつきぞすゞしき　神田まつ子

なつくれど庭の青葉のしげりつゝ　露にやどれるつきのすゞしさ　溝口奈保子

春すぎて涼しく見ゆるつきかげも　いとなつかしくなりにける哉　宮地　琴輿

今日よりは夏とは露もしらかしの　青木　春子
みつ枝もりくる月のすゞしき

夏ざれはやまのはもるゝ月かげも　三木ちと子
猶のおぼろに似すぞありける

夏ざれはすゞしかりけり庭もせの　久保田律子
わか葉にやどるみじか夜の月

夏ざれはそらにほのめく三日月の　瀬戸さと子
かげも涼しくおもほれにけり

なつくれどまだ遠山やかすみけん　菅谷こう子
影もほのかにつきいでにけり

きのふけふかすみの衣ぬぎすてゝ　伊東　文子
さやかになりぬ月のまゆすみ

春すぎてけしき知られてはれ渡る　伊達富貴子
くも井に見ゆるみじか夜の月

しけりあふ青葉がくれにてる月の　水谷　濟子
影こそなつのしるしなりけれ

足引のやまのはてらすつきかげの　黒澤　榮子
はれて見ゆるは夏のしるしか

さしいづる光りさやけし春すぎて　山崎きぬへ
月もかすみのころもかへけむ

はしゐしているまではみむ夏木立　山崎しま子
繁らばつきのかげももらじを

時鳥なきゆく見れば卯のはなの　山崎とね子
かき根の山につきぞかゝれる

五月五日兼題
時鳥を聞きて懐を述ぶ

天　廣島市新川場町　岡　佐波子

さみだれのふりくらしぬるゆふべつれ〴〵の心やりに書よみすさみ居る窓の外にふと聞ゆる時鳥の一聲こそいとゞかなしけれさるはさいつ頃は長閑なる春日に花よ蝶よと心も浮きたつむかりにたのしく暮したりしにいつしか春も過ぎ行きて今は花の名殘もつきはて梢は青葉のみ茂りて見どころなきに雨さへふりそほりたれバいとこうじぬるに一しほの哀れをそふるこの聲よかくおりふしの移り變るにつけては身のうへにおもひあはせられて

何時まで若くてのみ居るものかは花は散れども又咲きぬべし春は老ゆれども又若かへるべし人は一度び盛りを過ぎたらんには再び花咲く春もたのまれねど其盛りの若き時能く務め能くはげみ能く學びいたづらならざらんこそ打感ぜらるゝをりしもまた鳴き出づる二聲三聲はげに腸も斷たるゝやうにてなん

地

長野縣長野町上堀小路　坂口しん子

月のいと清う晴れ渡りたる夜ともに出づれど何所も眞晝のごとくにて已が影法師なとうつれるにもさながら友を得し心地のせられてなにとなくうかれ歩く程にふと稍暗き所にいたりぬ見わぐれど若葉ひまなく生ひ茂りていとものすごきにそか奥まりたる方に新しき碑の見ゆ近よれど是なん近き頃建てつる佐久間象山先生追悼の碑にはありける見るから昔の忍ばれて哀を催す折しもいつこどもわからず時鳥の一聲高く鳴き過ぐるをきゝてひとり思ひけらくあはれ昨日今日年の初めと思ひしにいつしか今年も春くれてさ月とはなりしとよなはかなきものは過ぐる月日なりけりげに昨日は今日の昔にて指折り數ふれど已もはや二八の春も過ぎぬ今のうち何ごともなく明し暮さんには何の世か世の人に數まへられむ已れ女に生れ出たれど武の道こそ覺束なけれ他し事にては成して難きことのあるべうも覺えずいでや今より女の道をつとめ勵みて後の世までも朽せぬ名を止めましと二度三度其碑を打ちなかめつゝいと人にも似ぬ愚さを思ひ出あげきつるに又も一聲遠く聞えて跡なくなりにけるはいとわかずなん

人

熊本縣菊池郡城北村　佐々有鄰子

なにごともおくれがちなる妾が身におくれぬものは耳ひとつなるがその耳にきこえぬるは鼠引の山たちいでゝ里の田翁をなぐさめかね遠方に啼きゆくかと思へど近き軒はの松の木末にかへり來て聲をしまぬ郭公なりあはれはかなき思ひをかきやりすつる友ともなりひとつふたつよみいつる歌のま

をりともなりて夕月の窓の戸よりさし入るさまさへなにとなうすゞしげなるにもひとへに郭公のなさけなるべしあなうれしや

植木　鋼子

むかししのぶの草の屋に雨ふりそゝく夕まぐれかたらふ友もなくいとしめやかになるをりしもそこともむかねと一聲さやかに音信ずてゝ過ぬあはれこの時鳥いましもおのゝ時來ぬとふるすをいでゝ遠く都の方へやいにけん同し音に鳴ふかせとも年毎に初音の心地せられて世の人の待わくがれ又歸る山路に別れををしまるゝ抔はしめよりをはりまて世にめてらる物あるをいつまでかゝゝる山里にのみすみてはいつこにのどけき年月を送り世のため人のためなす事もなくにや有べきいかで御國の民たる數にもれずさち有て一事のなし得らるゝ身ともならましかはいかに嬉しからましとそゝろに心のいさまるも時鳥の一聲に感じてなむ

宇多田揚子

雲と見し花は散り果てゝ木々は若葉の茂りに打かはりをかしく囀りし鶯の聲も古び霞みし空もはれ渡りて長閑けき春もいつしかくれぬれバ今日の無情のさまいとうらめしくて夢さへ結バぬ曉の空に忽ち一聲高うきこゑぬるは月になのりし時鳥よやあるらん枕に殘る其聲のいとゆかしう心地よさに又一聲もかなと待つ間程なく二聲三聲鳴きすて過るは殊更なつかしう覺えてなん

吉田　芳子

五月雨の空くもりかちにて田子の裳裾もはしあへぬ此頃さらぬたに物むづかしきをまして夕暗の空いとたど〳〵しきに身まかりし友垣の事ども常よりこひしう思ひ出てられてははしゐながむれど雲のたゝずまひ所々の景色もあはれ知り顏に若バの露も涙の雫かとぞ見えける

あはれ去年の今宵は共に郭公の初音を待ちはびたりしものを今は何所の里に待つらむげにはかなきものは命なりげにしたはしきもの友人なりなどひとり思ひに沈む折しもいつこともわかず一聲二聲

忍びになきなきいでたるいと哀まさりて悲しさいはむ方なくなん

本多千代子

ひま行く駒のあがき早く春をのせて走り去り花もいつしか緑りの若葉とかはりたれど遅櫻の青葉まじりに一つ二つ咲けるも初花より珍らしく若むらさきの藤のやう／＼さきいづるいとをかし書よむ事もはてたれどあたりの景色を見んとて立ち出て詠むるにくれ行春の名殘とておぼろにかすめる山間より月のさしかゝれるまがきに咲ける卯の花の雲をも欺く樣なるいとをかし昨日までほこりし花も無常の嵐にさそはれてちり去り一むら二むら地上に恨みを止むるも哀れにて實にや月にかゝる雲花をあらす風いづれも世のはかなさを知らするなめりなどゝはかなき事を獨り言ちける折りしも青葉のかげより一こゑ二こゑとかりほとゝぎすの初音なき出けるに今更年月の過ぎゆく事の早きをさとりぬ此の比きゝつと思ひしほとゝぎすも早や去年となりつるなりなどいふ折りしも又もや一聲の鳴きゆくは我がおろかなるをそしる如くなれバ羞しうてなん

土屋てい子

花橘の軒バににほひ卯花の雪垣根にえらむころ櫻の若葉もをかしくて待るゝ物は時鳥なりをりしも高根のくもをわかれ來て一聲二聲ふり出でみそらにさけぶを聞けバえかすかに聞き捨てがたくいとあはれ深しよりておもふに時鳥聞かむやと山つとをたつねては軒ばの松の雫落るをも心さびしともおもはねす山寺にこもり居て谷の水おとに心をすまし松間の月をながめやるもこよなきたのしみなるべし然れバ世は鄭聲を聞く耳は多かれど幽禽を愛するはいと稀なりあはれ時鳥よ汝か鳴く聲を聞て汝が身を思へよ曉の空に一聲名のり夕の雲に初音をもらしてあるを羇旅の人をして故郷を思はしめあるは詩歌の人をして吟情を逞しくせしむるも皆汝が聲のをかしきにありあはれ時鳥よかゝるうれしき御代なれどいづくの山のおくにも遺る人なきを知りてはやく都に名乘り出よかしあなあはれ

時鳥

三木ちと子

過にし月日のおと〻はゞ矢の行くさまもなか〳〵おろかなりけるぞうたてなし今年もはや五月雨とはなりぬふりしきる雨にとぢられしま〻書齋にたれこめて物おもひをれバわかこ〻ろのそこをしるや知らしなそらも夜ふかにわか宿を過ぎがてになく時鳥やよやまてわれこどつてん

去年の春の暮旅立ちしふしおもひやられわかれをしみてそなをあまりあるさま戀しさのいやまさりきてふるさとの父君母君はいかにおはすらむはらからはいかにやあらむともとちは何をまなびてぞふるさとにしもなきてさつらめやいひかけむよしもそのうちにいつち行くらむあなうたてなしされど文見る道の戀しさはいと丟たはれて來にし心の身にしあれど進まはなやよ見せぞやな文の道皇國に生れきて山よりたかき君の恩うみより深き父母のめぐみにむくひまゐらせむあなうれしきことにこそ

伊東あや子

月のゑんなる夕つかた軒のたち花香ににほふに昔末のふたにはあらねど何となうゆかしさにむらちかくいで〻みどりや〻ふかくなりわかくさいつしか青葉しげくなりさくらよろづなつのけしきになりにけるを時鳥はまだ音づれぬよなどおもひてつい居たる折ふしむかひなる山邊の方に忍びやかになのりてすぎゆく一聲をあなどむかり耳さとく聞得つるはいと〳〵嬉しかりしなか〳〵よもとめてき〻たるにはまさりてたゞ一聲もにほふむかりにおぼえてなん

兼題

- 五月廿日
  - 歌……卯花
  - 文……書を見る記
- 六月五日
  - 歌……里早苗
  - 文……あらまほしき事

餘芳

みちのつと（つゞき）

小池道子

すこしくだりたる所に、世恭親王のみはかあり。如意輪堂にわたらせ給ふ。延元帝の御木像、大塔宮の御畫像を拜ませ給ひ、また、楠氏三代の書ざうをも御覽ず。佛像、寶物ども多かる中に、ことにめづらしきは、楠正行の、やじりにて、とびらに彫りつけたる歌、さだかにのこりて有り。そのをりの心、おもひやるも、たゞ今の心ちす。

　あづさ弓やじりの跡の萬代につらぬくものはまことなりけり。」夕暮に、竹林院につかせ給ふ。ここには、みかどの宸翰の軸あり。庭のつくりざま、いとおもしろきに、大きなるしだりざくらさへあり。そのかみ、をり〳〵は、みゆきまし〳〵ける所也とぞ。

　よしの山花の木陰にみ心をなぐさめましゝ春もありけむ。」くれ行くまゝに、雲ふかくなりぬれど、おましのさうじ、さしこめけるに、よきくうき也など、いふな

らんとおもひしを、さすこそをかしけれど、わらはせ給ふ。雲にまめるを、いかゞは、よきくうきとはいはれ侍らんなど、なまくすしめきて啓するも、いとをこがまし。高き所より、ともし火のみゆるは、みな、此の院の木立に、かけつらねたる也。まそく奉りなどする所へ、宮の大夫、まゐり給へり。さかしき山路につかれたらん、とく、やすらへなど、仰ごとあれば、かしこまり給ひて、たゞ今、てんの川といへる村の人、廿戸のあるじにかはりて、みたり、まゐり侍り、後醍醐天皇の、信仰せさせ給ひし観音のみざう、にしきのみはた、巻物など、此の村まとて、給はりたるを、よゝのたからにひめ置き侍れば、御覧せさせんとてなん。南北御和睦ありて、都に還幸まし〳〵つる後、内よりわたらせ給ひたるは、此たび、はじめてにて、此のよし野の人々の、かしこまりよろこび、まことに、言葉に、つくしがたうこそはべれ。清き河にて、つりたる魚、生ながら、ふかき山にて、ほりはべりしわさびをも奉りはべるを、よきに啓し給へと申侍るになんとて、もてまゐり給へり。此の村、こゝを距ること、七里許にて侍りなど啓し給へば、あはれなること也とて、御まみのあたり、うるはせ給へり。まづ、そのたから物をひらかせ給ひて、人々も、め

しつらへて見せ給ふ。魚は、都にましまさんには、生ながら奉らましをなど、のたまふ。村人よは、こがねなど給ひしなるべし。そのよのことゞも、文の上にあらぬことをも、かたりつたへ、いひ傳へて、御まへにて、かたり給ふに、いよ〱たへがたし。

いまも手にあせをぞにぎるよしの山くちをしかりしむかしかたりに。」このたびの御旅、名所も、花も、さるものにて、畝火山の御さゝぎにまうでさせ給ひ、此のよしの、古宮のむかしを、したしく尋ねとはせ給ひ、風土人情をも知しめさんの御心おきてを、うち〱に、うかゞひまり侍りしに、けふは、わたらせ給ふ所ごとに、しのび兼ねさせ給へるみけしき多かりき。

廿一日。曉に、しそくまゐれと仰せらるゝに、むかしの夢もさめはてゝぬ。あの音は、何ぞとのたまはする、雨だりにて侍りと啓すれど、あなうたて、かの山坂を、あゆみて、みともつかへんひと〱、いかにくるしからんなど、のたまふ。たゝせ給はんまでには、やみ侍らんなど、み心をやすめ奉る。明けたるころはやみたるに、またふり出でたり。

よしの山千もとの林分けくればわかむかをりて小雨ふりきぬ」。みをくり奉れる人の衣げさも、昨日にことならず。家ことに、小松を引きうゑ、あるは、つゝじを、まどにさしなどして、いはひ奉れる心ぞへ、哀れ也。こしべにて、ひるの御まうけ、かねて、つかうまつりたれど、餘りに早ければとて、戸毛にて奉る。道は、すべて、昨日のごとし。一時ばかりに、畝火山のふもとよつかせ給ひ、勅使館にて清めさせ給ひて、かし原の神社にまゐらせ給ふ。神殿は、西京の賢所を、拜殿は、神嘉殿を移させ給ひたるよし也。清らに、かう〳〵し。綏靖天皇の御陵にも、まうでさせ給へり。田原本の淨照寺、今夜の御やどりにて、つかせ給ふ。ところの人、例の小女どもに、琴ひかせて、なぐさめ奉る。それがまひをも御覽せさす。千本櫻、靜など、吉野にゆかりある舞ども、つねよりも、身にしみて、みな、なみだおとしぬ。今日も、ともすれど、よしのゝ物語、いひ出でらるゝに、宮の大夫、塔尾の御陵にて、讀みたりとかたり給へるをきけば。

そのかみにわれもありせば大君の衣このみたてとならましものを」。哀れにて、あまたゝび、打ちずしぬ。

廿三日。午前八時に出でたゝせ給ひて、中宮寺につかせ給ふ。雨、いたくふりて、餘りにいぶせかりければとて、高殿に、おましゝつらひて、ひるのみけたてまつる。のべのけしき、心安くて、はしちかく、いでゝ見るに、み奉る人々、思はぬ方より近づくを制する巡査、いとまなげ也。住職の尼君、平松の姫君、打ちぐしてまいり給へり。法隆寺にあないしたてまつる。聖靈院、金堂、五重塔、講堂、西圓堂、みな、御覧す、聖徳太子の、ふたつにならせ給へる年の御像よりはじめて、夢とゝのはてまで、此のみてらにこもるべし。かたはしも書きしるしてんとおもへど、あやまちなどとめんはとて、みなもらしつ。けふは、あめ、いたくふりて、梅雨のそらに似たり。みぞも、しとゞにぬれさせ給へり。

廿四日、朝曇る。けふは、道遠ければ、とく出でたゝせ給はんことを、おきてさせ給ひて、御まうけしはてたるに、此の頃の雨に、みかさ増りて、大和川のはし、そこなはれたれば、けふひとひ、とゞまらせたまはんことを、願ひいでんもはかりがたしと啓す。あなうたて、またも降り出でんには、外のはしも、いかなることかあらんなど、いふを聞こしめして、うへの御舟は、霧ふかくして、すゝませ給はずと

うけたまはる、ひとひをかり、とゞまるとも、何のうきこともあらんど、のたまはするを、かしこまりてうけたまはる。とかくするうちに、人々、ちからをつくして、橋つくろひはべりぬとけいするに、九時頃に、立ち出でさせ給へり。つく〴〵と、ながめさせ給へる頃や、よませたまひけん。

ひよりまつ御舟のうらやいかならん霧たちわたるあら波の上に」。まことに、さる御こと〻うかゞひたてまつる。み車とともに、雨もふりいでたり。かの橋の、あやふげなればとて、かしこくも、かちよりわたらせ給ふ。たつたやまは、若葉、みどりにつらなりて、雨にぬれたるけしき、中々によし。川は、雨にてにごりたれど、みなぎる音清し。四里餘りの道なるに、雨、いたくふりて、あつき日なれど、車のうち、いふせし。大和川のすぢ、めぐりめぐりて、岩にあたる水のけしき、何の淵とかいはまほし。柏原にて、ひるのおもの奉る。奈良縣知事をはじめ、謁を賜ひ、物給ひなどす。あやにくなる雨に、いかに、心をわづらはしけん、風たちて、神の音聞こゆるに、例のみ舟の上、おぼつかながらせ給ふ。十二時三十分の汽車にて、いでたゝせ給ふ。ほどなく、はるかにみゆるは、天王寺の塔ならんなどいふ。港町

の停車場になりぬれば、大坂より出でむかへたてまつれる人々、おびたゞし。こゝより、馬車にのらせ給へり。都よりはじめて、みちのくまぐ、人のむれたゝぬ所なく、ところぐに、花火打ちあげて、野も、山も、さびしとおもふ處なかりしに、まして、こゝのにぎはひ、いはん方なし。馬車のうち、いよいよあつし。所の名も、しらぬがちにて、博物館につきぬ。うしろの方に、あらたにしつらひたる所に請じ奉る。おもしろきものゝ音の聞こゆるを、まく引きわたしたれど、見えねど、府下の人々の、打ちよりて、清樂奏するなりとぞ。博物館の物ども、見そなはし、もとのおましにかへらせ給ひて、人々の心しらひ、いたづらよやはとて、引きわたしたるまくを、とりてと仰せごとありて、樂きこしめす。をかしきをとめ子の、けふをはれと、けさうしてゐたるさま、花やかにめでたし。梅田にとたゝせ給ふ。天満ばしに、御車とゞめて、花火御覽せさす。みちのほど軍人、かずしらず、立ちならびたる大御代のみいつ、更にあふがれてたふとし。停車場の人、はた、いくばくならん。きさよりみれば、山のすがた、やうかはりて、おもしろきを、名もしらで過ぎ行くが、いとあたらし。程なく、海見え初めて、神戸につく、湊のにぎはひ、横濱にも、

おとるまじうおぼゆ。生田のもりよなど、いふまに遠ざかる。湊川の下を、今行くときけど、楠公のみやしろはみえず、心のうちに、をがみてゆく。山といふ山をめぐりきぬれば、海のけしき、ことにめづらしう見わたさる。すまのうらは、このわたりなるべし。並木のまつ、立ちさかねてみゆれど、このあたり、家居立ちつゞきて、すべては、畑になりぬ。上野のすゝき、しげるべうもあらず。柳原權のすけ、

みくるまのうちより見れどすまの浦のまつむらでしに白波ぞたつ」。おもしろくも、よみ給へるかなど、うらやまし。一のたにゝ近づきぬ。ひえどりごえ、さかしといへど、今は、馬にてこえんも、かたからじなど、鮫島中佐、かたり給へど、のぞき見るに、軍人の心には、さおもひ給ふらむ。されど、むかしは、さかしかりけんもしらず。平敦盛の塚、近しときけど、みねず。とかくするうちに、舞子につく。松の木立、いひしらずをかし。下に、小松の、むら〱生ひしげるなど、繪に書きたるやうなり。行啓の爲、ことにつくりたる停車場にて、おりさせ給ふ。御やどりは、河合宇兵衛が家也。

副島伯爵校閲
東久世伯爵著　松本楓湖畫

尋常小學修身入門　全一册　一册金二錢八厘

全　教師用　全一册　一册金七錢

尋常小學修身書　全四册　毎册金七錢八厘

全　教師用　全四册　毎册金十二錢

高等小學修身書　全四册　毎册金九錢七厘

全　教師用　全四册　毎册金廿五錢

尋常小學國史談　全二册　毎册金十錢

高等小學國史　全三册　毎册金十九錢

中學國史　全六册

發兌所　國光社

女鑑第六十二號目次

社告

○代價は通貨又は郵便爲替小爲替銀行爲替及通運にて本社へ御直送之事○郵便爲替は東京銀座郵便取扱所へ御振込可被下事○郵券を以て代金に換用せらるゝ時は一割増の事○別に領收證を出さず代金領收の上は直に女鑑を發送すべし若強ひて領取證を要せらるゝ方は別に郵送料御送附の事○未納稅の來書は一切受取不申候事

女鑑

毎月貳回五日廿日發行

定價壹册金十錢
三ヶ月前金五十五錢
半ヶ年前金壹圓
但全國無郵送料
廣告料五號活字二十字詰一行金二十錢

明治廿七年五月四日印刷
同年同月五日發行

東京京橋區築地二丁目二十一番地
發行兼印刷人　川崎直衞
同
編輯人　山根勇藏
同
發行所　國光社

(印刷所　東京國光社印刷部)